

流域の人々と歩む月刊誌

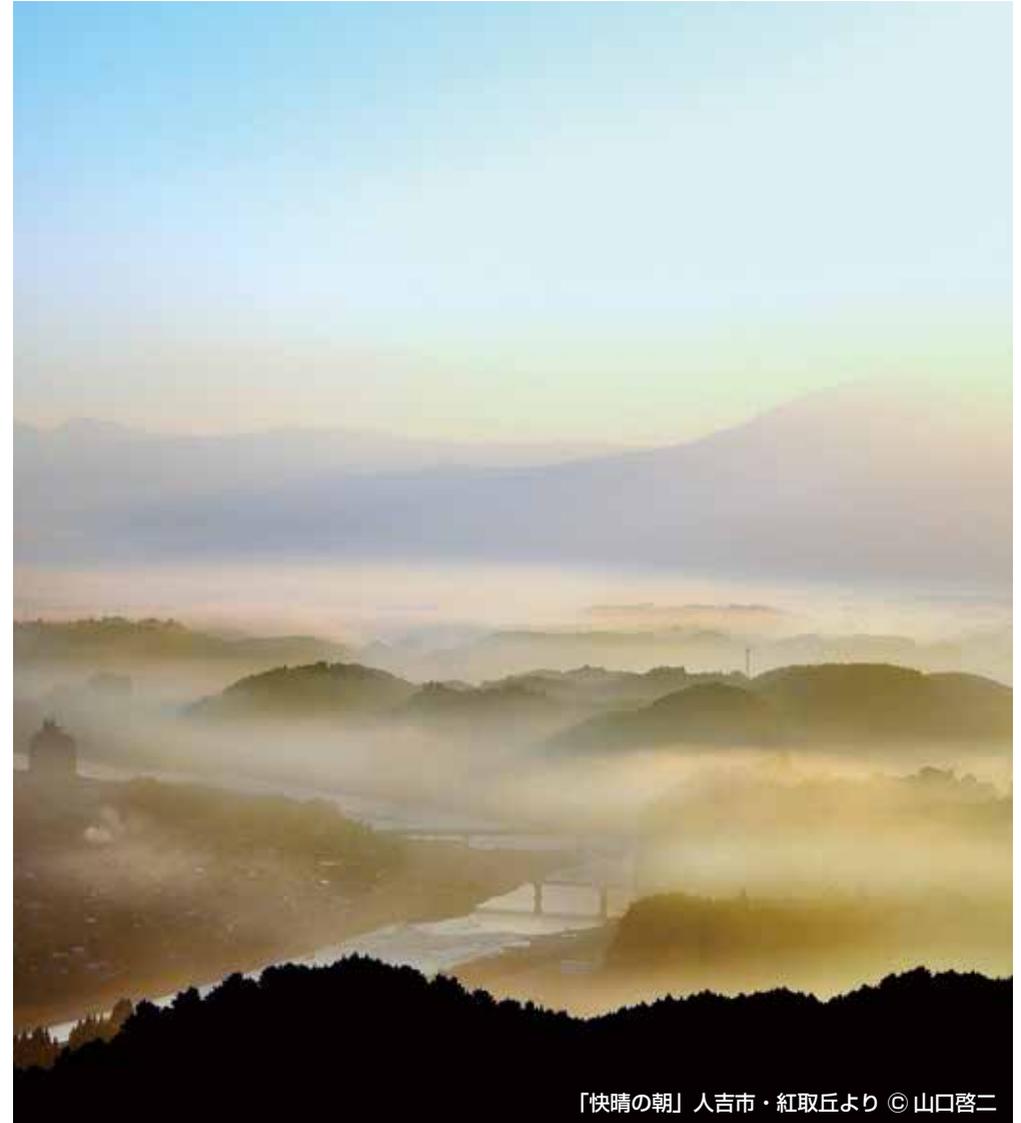
くまがわ春秋

2020

1

第46号

今、君の瞳は輝いているか



「快晴の朝」人吉市・紅取丘より © 山口啓二

月に願いを。

織月

せんげつ

Japanese Traditional Rice Shochu
SENGETSU



織月城（人吉城跡）にて撮影

織月酒造株式会社
SENGETSU SHUZO CO., LTD.

〒868-0052 熊本県人吉市新町一番地 TEL.0966-22-3207

飲酒は20歳を過ぎてから。飲酒運転は法律で禁止されています。
妊娠中や授乳期の飲酒は、胎児・乳児の発達に悪影響を与えるおそれがあります。

<http://www.sengetsu.co.jp/>

月刊 くまがわ春秋 第46号 2020年1月9日発行

企画：人吉球磨総合研究会 発行：人吉中央出版社
〒868-0015 熊本県人吉市下城本町1436-4の3号

TEL.0966-23-3759 / FAX.0966-23-3759
<http://www.hitooyoshi.co.jp/> info@hitooyoshi.co.jp

定価 550円 本体 500円

雑誌 81779-01-0



4910817790109
00500

最近のおもな出来事

- 12月1日(日)
 - ▽第52回人吉市歳末たすけあい演芸会(人吉市カルチャーパレス)
- 12月11日(水)
 - ▽人吉労音例会「池山由香&篠原梨恵クリスマスコンサート」(人吉市カルチャーパレス)
- 12月15日(日)
 - ▽年賀郵便特別扱い開始
- ▽第67回球磨一周市町村対抗「熊日駅伝」大会(人吉城跡ふるさと歴史のひろばスタート・ゴール)
- 12月27日(金)
 - ▽宮公庁仕事納め
- 1月1日(水) 元旦
- 1月3日(金)
- ▽人吉市成人式(人吉市カルチャーパレス)
- 1月6日(月)
- ▽宮公庁御用始め
- 1月10日(金)
- ▽人吉市九日町「初えびす」

1月号(第46号) 目次

- 川上哲治氏の偉業を顕彰…3
- 柳人があじわう漱石俳句④⑥ いわさき楊子…9
- おととわつとあすび③⑥ 松舟博満…19
- 住みたい田舎ランキング① 岐部明廣…24
- くまがわの神さん仏さん④① 宮原信晃…26
- 建築みてある記④①「塩屋八幡宮」森山 学…30
- 「あがつ段」④③ 上杉芳野…34
- 雑感「岬詣」の探旅 富永和信…36
- 記憶の落ち穂「黒船前夜」坂本福治…39
- 漢和字典は面白い②⑨ 鶴上寛治…46

坂本は化石の宝庫

つる詳子…4

人吉球磨の茅葺屋根

上村和代…10

今年もやるバイ、やつちろ ドラゴントレイルラン

吉田諭祐…20

今月の一言

『文読む月日』(レフ・トルストイ編著 北御門二郎訳)より

富める支配階級と貧しき被支配階級に別れている世の中なんて、最初からでたらめだと言っはかはない。

表紙写真

「快晴の朝」人吉市・紅取丘より

この時期、深い霧に包まれる日が多い中、霧が出る筈の日に下からはまったく見つけられない時がタマにあります。そんな朝に紅取丘に登ってみると下からは見えなかった霧はかなり下の方に、ご覧のように出ていました。こういう日は年に数回なのでしょう。



撮影/山口啓二(人吉市)

鶺鴒短歌会「平成を詠む」…47

- 私の一冊『流転の海』を読み 岡村小夜子…48
- 倉敷便り③⑥ 原田正史…50
- 小説・相良清兵衛⑤ 山口啓二…52
- 俳句大学投句欄② 永田満徳…57
- 方言を味わう④①球磨弁の接頭・接尾語 前田一洋…58
- ダム書評④ 脱「基本高水治水」研究誌 森明香…60
- お休みどころ通信① 興野康也…65
- いもご短歌会…67
- ひろしの…げっかん・ぎひょう…75
- 外来語から学ぶ英単語④⑥ 藤原 宏…75
- 砂時計―思い出るままに⑭ 小野武己…76

今、君の瞳は輝いているか

谷口巳三郎物語①

上村雄二…40

熊本県近代文化功労者 渋谷敦のこと

木崎康弘…68

本誌の
取扱店舗

■清藤書店 ■ブックスミスミ ■明屋書店 (錦店・免田店・多良木駅前)
■道の駅さかもと ■TSUTAYA 八代松江店

川上哲治氏の偉業を顕彰



人吉クラフトパーク石野公園で開催中の企画展

12月8日には、「V9戦士記念トークショー」が人吉市カルチャーパレス大ホールで開かれ、巨人軍のV9時代に活躍した王貞治氏と末次利光氏、元日本テレビアナウンサーの小川光明氏が革新的なチームづくりをした川上像を明かした。



12月8日に人吉市カルチャーパレスで開催された「V9戦士記念トークショー」

「打撃の神様」と称され、人吉市
の名誉市民でもある川上哲治氏が、
今年3月23日に生誕100年を迎
えるのを記念して、各種のイベン
トを行う「野球の聖地化プロジェクト」
が人吉市で進められている。

人吉クラフトパーク石野公園
では川上哲治氏にゆかりのある
記念品等を中心に、熊本県・野
球殿堂博物館・読売巨人軍・
読売新聞などの協力を得ての展
示を行っている。

この他、高校生硬式野球交流試
合や社会人軟式野球大会、全国
の生涯野球チームが人吉にある川
上哲治記念球場で交流試合をする
【Japan Baseball Jurassic 2020】
を開催する予定で、2020年4
月11日を交流試合の開幕日とし、
全国に1万以上あるシニア野球の
チームに呼びかけ、交流試合を開
催する予定。

生誕100年を記念して様々なイベント 人吉市で聖地化プロジェクト進行中

巻頭言

オリンピックイヤー

今年「オリンピックイヤー」。マスコミは今後、オリンピックを毎日のように話題にしていくだろう。報道が過熱して、オリンピックだけがニュースかといった批判がでるかもしれない。オリンピック話ばかりでは確かに飽きるし、社会の動きをつかめなくなる。マスコミの知性が問われそうだ。

もちろん開催を楽しんでいる人は多いだろう。日本選手の活躍を期待している人もずいぶんいるにちがいない。そのことに異論を挟むつもりは毛頭ない。それを前提に言うが、オリンピック（パラリンピック）の目的はなにかと問われると意外にむずかしい。開催国（正確には、開催都市）の「経済的高揚」にあると説明されるとき、それを否定する理由はどこにもなく、関係役員、参加選手の利益に目的があると指摘されるならばその通りだと答えるほかない。「選手ファースト」が流行語になっているが、開催時期の決定という出発点問題を考えるとき、それを「選手ファースト」で説明できないし、特定の競技・選手に注目する行為は「選手ファースト」というよりは「美人コンテスト」的だと皮肉をいいたくもなる。「流選手」の卓越した運動能力・技術を目にしたとき、われわれは一種の感動を覚えるが、その一点もこのとを集約させていいのかと問われるとそうではないと答えるほかないだろう。「一義的結論はなく、それぞれの人がそれぞれに答えを用意できればそれでいい」という無難な結論に最後には落ち着きそうだが、そういう寛容性をもつ点にオリンピックの意義があるともいえない。はい。

クーベルタン男爵は「参加することに意義がある」といった。それは現在でも正しいだろう。戦争状態や政治的対立の状況下ではオリンピックは開催できない。経済的に厳しい国の選手は練習時間の確保がむずかしいなどの事情で「参加する」ことで精一杯だろうし、同じことは日本選手にも当てはまる。生まれつきの天才だけがオリンピックで活躍するわけではない。そのことも、オリンピックを考えると忘れなければならない。

（春秋）

坂本は化石の宝庫

坂本町で日本最古の恐竜の化石発見

自然観察指導員熊本県連絡会会長 つる詳子

昨年1月26日、「八代に日本最古の恐竜化石」の出しが各新聞の一面に躍ったことは記憶に新しい。その後、目新しい情報もなく1年近くが過ぎたが、12月22日、坂本で開催された学習会「古代の坂本町に恐竜はいたか？」が開催され、より詳しい情報が報告された。恐竜がいた白亜紀に限らず、坂本はそれ以前の古い地層が多く見られ、化石の宝庫でもある。これを機会に坂本の地層に感心を持つ人が増えてくれることを願う。

恐竜の化石発見

当時の新聞によると、恐竜の骨が発見されたのは、白亜紀前期の地層「川口層」。芦北町田浦から東南の方向へ、球磨川を坂本町川口で横切つて八代市東陽町まで帯

状に約40km程細長く伸びている。発見したのは、合志町の村上浩二さん。一帯の地質を調査していた2014年10月に、厚さ10cmほどの泥岩の中に、骨の化石が露出していたのが付いたという。御船町の恐竜博物館に持ち込まれた骨の化石が、日本最古の恐竜だった。肋骨の一部と見られる化石は、断面が細長い楕円形で、その特徴は「2本脚で歩行するアロサウルスなどの獣脚類の肋骨の特徴と一致する」とのこと。アロサウルスの体長は8〜10m。探せば同じ地層から、この恐竜の他の部分の化石が保存されている可能性は高い。

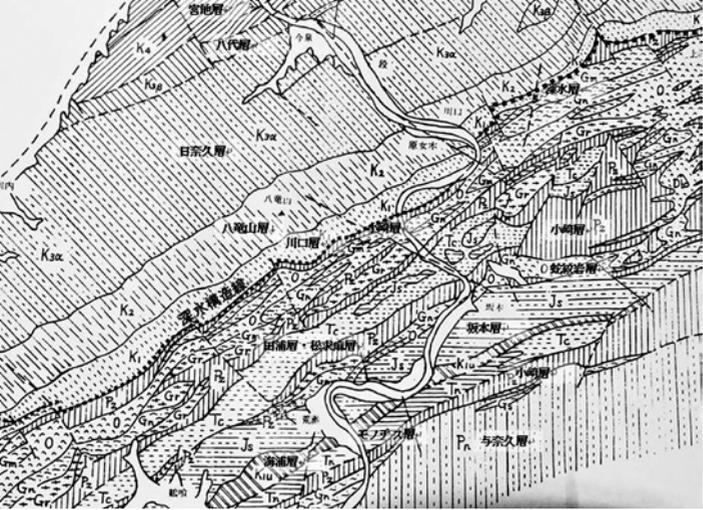
12月22日に開催された学習会「古代の坂本町に恐竜はいたか？」の御船町恐竜博物館の主任学芸員池上直樹さんのお話は分かりやすく面白かった。恐竜とは何かに

始まった。恐竜は、空を飛ぶプテラノドンなどの翼竜や魚竜は含まれず、「直立歩行をする爬虫類」だそうである。なので、関節を曲げているワニなどは恐竜には入らないが、「始祖鳥」は恐竜に入ること。そうかもとも思っても、現在も生きている恐竜がいるという話にながかり参加者の興味をひいた。現代に生きる恐竜、それ

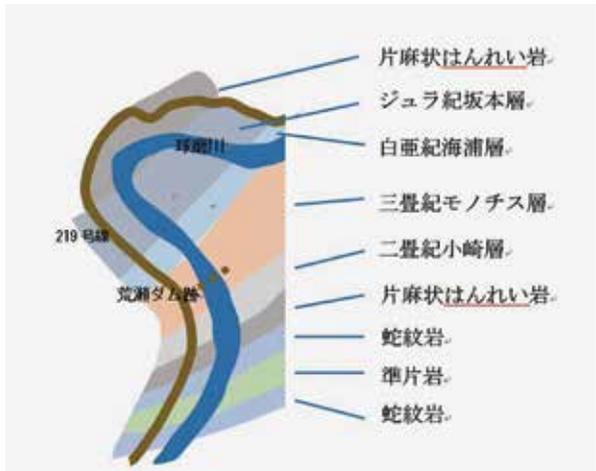
は鳥。共通点は、①叉骨（鎖骨付近にあるV字型の骨）がある、②羽毛を持つ、③固い殻をもつ卵を産む、④肺の前後に気嚢があることの4つだという。

坂本の地層は、白杵―八代構造線と仏像構造線に挟まれ、太平洋プレートが沈み込んだ四十帯の西側にあり、白亜紀の地層もある。大昔は浅い海であり、汽水域

の二枚貝やアンモナイトなどが見つかると、恐竜発掘の手掛かりとなったのは、川口層から淡水の二枚貝であるトリゴニオイデスが見つかったことで、この化石は恐竜の化石と一緒に見つかることが多いという。トリゴニオイデスも年代の違いにより変化するが、坂本から見つかるものは古い年代のものだということ。



坂本地域の地層：白杵―八代構造線と仏像構造線に挟まれたこの地域には、帯状の地層がいくつも重なる（「熊本県地学巡検ガイドブック」を元に作成）



荒瀬ダム跡付近では中世代のいろんな地層がある。モノチスの産地である

川口層と坂本の地層

白杵―八代構造線と仏像構造線に挟まれた帯状の区間は秩父帯と呼ばれるが、白杵―八代構造線以北の肥後帯や仏像構造線以南の四万十帯とは大きく異なり、様々な帯状の地層や断層によってできたレンズ状部と言われる地層が複雑に重なり、古生代のシルル紀から三畳紀・ジュラ紀・白亜紀の地層が見られる。秩父帯は、北側の黒瀬川構造体帯と南部の三宝山帯に2分されるが、黒瀬川構造帯は八代付近では幅10km程にも及び、坂本



山江林道沿いにはジュラ紀の大褶曲と断層を見ることができる



坂本町川口。川口層はこの地点から球磨川を挟んで、北東―南西に帯状に伸びている

はこの黒瀬川構造帯の地層が多く見られ、地質学的にはとても面白いところである。古生代の地層が見られるのは、下深東南西部から上深水東部までレンズ状に点状する深水層では、最も古い年代の地層でシルル紀の浅海性の層が見られる。坂本町小崎谷から破木に及ぶ破木構造線の北側の小崎層は、ペルム紀の地層で、礫岩・砂岩・頁岩・石灰岩・花こう岩・蛇紋岩などが複雑に重なり、フズリナや放散虫の化石が産出している。

坂本に見られる中生代の地層は、主に浅海性の地層で、荒瀬ダム付近は、三畳系の地層、球磨川沿いや深水構造線と破木構造線に挟まれた坂本層や走水滝付近の走水層はジュラ紀の地層である。

恐竜の骨の化石が発見された川口層は、深水構造線の北側にあり、白亜系の地層で主に浅海性堆積物から成る連続した帯状配列を形成している。すなわち、川口層は太平洋プレートによって運ばれた破砕帯ではなく、日本が大陸の一部で

地層を学べる坂本に

段駅から球磨川を遡ると、日奈久層・八代層・八竜山層・川口層があり、川口から深永川に入ると、川口層・下深水の手前で深水層・小崎層、上深水までは雲母片麻岩・蛇紋岩の層などがあるというが、残念なことに、今道路脇はみんなコンクリートで覆われていて露頭を見ることはできない。

同様に、坂本の大門集落を過ぎたあたりから、旧八代東高校坂本分校跡の前を通り荒瀬ダム付近も中世代の地層が現れ、昔は子供たちは授業で地質・地層の学習に来ていたというが、今はすべてコンクリートで覆われてしまっている。

これだけ、面白い地層が楽しめる地域はそうないのに、球磨川沿いの道路だけでなく、球磨川の支流沿いの道路に至るまで、殆どコンクリートで覆われ露頭が殆ど見られないし、川の中の石からも発見される可能性があるのに高いコンク

あった頃、沿岸部が横ずれ断層によって北に移動する時に形成されたものやその後付加された破砕帯から成る層で、その後太平洋からのプレート移動で剥ぎ取られた破砕帯が西側にくつき形成された四万十層と仏像構造線で分けられている。川口層は厚い礫質の砂岩・砂岩・泥岩の互層からなり、これまでに植物化石や汽水性の二枚貝・巻貝が発見され、トリゴニオイデスはその一つである。

代東高校坂本分校跡の前を通り荒瀬ダム付近も中世代



八代東校坂本分校前の道路。現在はコンクリートで覆われ、露頭は全く見られない



川口付近でコンクリとコンクリの間に見られる川口層と思われる地層

柳人があじわう漱石俳句

— 46 —

いわさき楊子



漱石は熊本で俳句を約1000句も詠み、その後も生涯にわたって俳句を楽しみとした。熊本時代は英語教師であるとともに正に俳人だった。そうなるまでの経緯に触れたい。

漱石と東京大学予備門で同級生だった正岡子規は、病気を抱えながらも新聞「日本」に「瀨祭書屋俳話」の連載を始め、江戸後期に停滞していた俳句の革新運動に着手した。そのころの漱石はまだ俳句にそれほど熱心ではなかった。

漱石は28歳のころ松山の中学校に赴任した。病氣療養のため地元松山に帰省した子規は漱石の下宿（愚陀仏庵）に52日間同居することになる。そこでは地元の会員の句会が連日開かれ、漱石も自然と俳句に浸ることとなる。そうして俳句への熱を持ったまま、数カ月後の明治29年4月に熊本の第五高等学校へと赴任したのだ。

熊本に来てからも子規にたびたび句稿を送って

紫溟吟社

評を仰いでいる。そのような俳句熱を五高の学生が気づかぬはずがなかった。漱石の家には学生が入りやすくなり、とうとう明治31年10月2日、漱石の内坪井の家で11人の句座が開かれた。これが「紫溟吟社」の始まりである。ところが指導的な役割は果たしたが、新聞に俳人として自分の名を出すことには消極的だった。ここに漱石の俳句への躊躇のようなものが感じられる。

寺借りて二十日になりぬ鶏頭花

(漱石31歳)



句会場になった五高近くの忍法寺
(熊本市中央区西子飼町)

【いわさき楊子／川柳と俳句の愛好家、熊本市在住】



12月22日の恐竜学習会には多くの参加があった



川口層から見つかった化石は恐竜の肋骨の一部と見られるとのこと

リート護岸で覆われ下りることもできないのは、大変残念なことである。

日本には恐竜はいないと思われていたが、現在全国各地40カ所を超える地点から恐竜の化石が見つかり、今や日本は恐竜王国とまで言われている。恐竜を町おこしの起爆剤に地域一体となって取り組んでいるところも多い。そんな中、日本最古の恐竜の骨の化石が発見された

坂本で何の活動も行われず、子供たちの夢も膨らませてあげられないのは、なんとも、もったいない。

化石が発見された場所も、荒らされる危険があるとして公表されていないが、囲って保存して、学習の機会に入れるようにするとかできないのか。また、道路沿いのコンクリート壁も安全なところは壊して露頭を復元するか、地層が見られるところに見学用の道路をつくるか、安全に川に下りられる斜路をつくるか出来ることはいくらでもありそうである。

過去この地域で多くの化石が発見されたという事実が今の子供たちには全く認識されていないのと同様に、このままでは、日本最古の恐竜の化石発見のニュースも風化しかねない恐れさえある。坂本町ももちろんであるが、八代市ももっともっと力を入れてほしい。それだけの価値と魅力があるのが、坂本の地層である。

【霧・しょうこ／八代市】

人吉球磨の茅葺屋根

上村和代

昨年9月の初旬。多良木町黒肥地の長運寺薬師堂で、茅葺屋根の補修が行われることを知り、作業現場を見学させていただきました。

長運寺薬師堂は、弘和3年（1383）に相良氏に



補修前の長運寺薬師堂



補修後の薬師堂

よって建立されたと推定される、多良木町の指定文化財建造物（昭和36年7月18日指定）。こじんまりした簡素なお堂ですが、14世紀頃の仏教建築の特色をよく表した建物とされています。

作業は9月半ばから11月頭まで行われました。施工にあたったのは、球磨地方唯一の茅葺師グループ「田代組」。人吉市の中村澄治さんを中心とした五人の茅葺師



田代組リーダー 中村澄治さん

です。中村さんは、青井阿蘇神社（幣殿・拜殿・楼門）、多良木町の青蓮寺阿弥陀堂など人吉球磨の数々の文化財の茅葺屋根を手掛けてきました。文化財保護に多大な功績があったことが認められ、2019年春には「茅葺師」として旭日単光章を受章されました。

現在、中村さんは、86歳。ご高齢になり通常の作業は、

弟子の大石和広さんに指揮を預けています。棟部分など重要な箇所

では、中村さんが指導しながら作りこんでいました。民間で伝承されてきた茅の屋根葺きにマニュアルはなく、素材も自然の物を使うため、建物の立地条件や茅の状態などその時々で扱い方が異なるためです。

「現場で一緒に作業して覚えてもらうしかない。昔と違い、作業件数が少ないので二つ二つの現場が大切」

と、中村さんは技術を伝える難しさを話してくれました。後継者不足にも悩んでいて、男女を問わず少しでも茅葺屋根に興味をもつ人が増えてくれるなら、と取材にも協力してくださいました。

茅葺屋根について田代組のみなさんからお話をうかがったり、資料を調べていくと、知らないことが多くて驚きます。

「茅^{カヤ}」という植物はありません。

「茅」とは、屋根材料に使われるイネ科の植物の総称。稲わら、麦わら、ススキや葦などが「茅」と呼ばれます。人吉球磨地方では、主にススキが使われています。

茅葺屋根が多かった時代、屋根の葺き替えや修繕は隣近所や親戚など地域の人が協力して行っていました。中村さんたちが「田代組」と呼ばれるのも、人吉市田代地区（現在の上下田代町）在住で地域の屋根葺きを担ってきたことに由来します。また、地区には「茅場」という屋根用にススキを管理する広場があり、当番で世話を



田代組のみなさん

していたと言います。病害駆除のため、年に一度は火入れをし、雑草が混ざらないよう定期的に草取りを行います。稲刈りが終わると、協力してススキを刈り取り、屋根葺きに適した太さに選別して干す。……など、屋根を葺く良質な茅にするため手間をかけていたようです。

戦後、茅葺屋根は火災に弱いこと、数年ごとに修理補修が必要で人手がかかることなどから、屋根を瓦に葺き替えたり、茅葺をトタンでくるむ家が急速に増えます。昭和25年からは建築基準法により新築する建物に茅が使用なくなると、茅葺屋根は文化財など特別な建物を除いて姿を消してゆきました。

需要がなくなれば、生産量も減るため近年は、文化財の茅葺屋根補修用の茅も必要量の確保に苦労しているようです。今回の長連寺薬師堂の補修でも、阿蘇の専門業者から購入した茅が使われました。

平成30年、文化庁は、茅の刈り取り・乾燥させるための茅立て・選別して屋根葺材料にする茅選りなど一連の作業を一括し、「茅採取」として選定保存技術に指定しました。一般社団法人日本茅葺き文化協会が、技術

た屋根の谷になった部分は葺くのが難しく、ほかの箇所とは異なり茅束の中から穂先が広がった物を選んで使うのだそうです。茅葺師としても貴重な経験になると期待していただけたに諸般の事情により、県外の業者が施工することになったときは、少々がっかりしたとか。しかし、重要文化財の解体には慎重な作業が求められ、人手がいることもあり、田代組も屋根の解体作業に加わりました。茅葺屋根は、屋根の骨組みに縦横に竹を配置し、茅の束を縛りつけて組み上げてゆきます。地方によって縄のかけ方や縛り方、茅の組み方が異なるため、太田家住宅でも球磨地方独自の部分については中村さんが監修と指導に当たりました。古くから文化的な交流のある鹿児島や宮崎と球磨地方ですが、茅の葺き方では違いがあり、中村さんはそれらを熟知している数少ない職人なのです。

球磨独特の「みこし屋根」

球磨地方の茅葺屋根で、もっとも特徴的なのは「みこし屋根」と呼ばれる葺き方です。棟の部分にもう一段屋根を重ねて葺く方法で、格式ある建物にしか用いられま

の保存団体として認定を受けています。今では屋根材料に使う良質な茅は、貴重品。茅を刈るのも文化庁が認める「伝統技術」なのです。

田代組の活動は、熊本県内にとどまりません。鹿児島や宮崎、福岡などから仕事の依頼を受けるほか、県外の同業者の補佐に入ることもあります。それは、全国的に茅葺職人が不足しているためで、人吉球磨でも文化財の茅葺屋根の葺き替えや補修を他県の業者が行う場合もあります。

平成18年から21年にかけて、多良木町の太田家住宅で、すべての部材を分解し修理ののち再建する解体修理が行われました。太田家住宅は、人吉球磨地方の民家の特徴である、棟が直角に曲がった「鉤屋造」を代表する建物で、昭和48年に国の重要文化財に指定されています。

当初、屋根の再建は中村さんの先輩職人を棟梁として地元の職人が屋根を葺く予定でした。太田家住宅ほどの大屋根を一から葺くことは近年では珍しく、田代組でも参加を楽しみにしていました。特に折れ曲がつ

せん。現在、眼にすることができるのは、青井阿蘇神社の楼門の屋根だけ。よく似た形に葺かれた屋根はあるのですが、県外の職人が葺いたため球磨地方とは作り方が異なり、田代組のみなさんによると「みこし屋根とは違う」のだそうです。

屋根葺きを使う道具も地域によって違いがあります。同じ九州の中でも福岡や大分では、茅を竹に固定すると



青井阿蘇神社楼門のみこし屋根

き、くさび状の道具で茅をこじ開け、直接腕を差し込み、縄を取ることが多いのだとか。球磨地方では、棒の先端に穴をあけ、縄を通し、それを茅の間に差し込み縄を渡します。その形から「針」と呼ばれています。そのほか縄を切ったり、



特に重要な角の部分は大石さんが担当



作業は下から上へ



棟を葺く



茅を足しながら、足場になる道竹をくりつける



両側にはみ出した茅をだまかに切りそろえる



棟の両側に茅を固定するホテを置く



折り茅の上にタン板をのせ



ホテとホテの間



上は縄をかけるため茅を分ける「クサビ」。突き刺してひねることで隙間を作る。下は「コテ」。茅を打ち込んだり、たたいて平らにならす。職人が手作りする



「針つき鎌」の説明をする大石さん

道具の中でも鎌や屋根の仕上げに茅を刈りこむ大きな鋏などは、専門の鍛冶屋に依頼します。鍛冶屋が減っている上に大型の鋏を作る技術を持った鍛冶屋は全国的にもめずらしくなっています。その貴重な鍛冶屋の一軒が、湯

を使っていることがわかりました。もしかすると、古い時代に茅葺師が都から人吉球磨に來ていた証拠かもしれません。今後調べてみたいと思います。

ひっかけて手繰り寄せるのに使う「縄とり鎌」という小型の鎌があり、その持ち手を「針」に加工した「針付き鎌」もあります。道具は、職人自ら手作りすることも多く、田代組でも自分たちで工夫した道具が使われていました。大石さんの話では、県外でほかの職人と一緒に仕事をするうちに大石さんが使う「針」が便利だと、福岡の職人にも

使う人が出ているそうです。逆に、大石さんも他県の職人が使っていた茅を割るくさびを取り入れていました。道具についてインターネットで調べていると、近畿地方の職人も「針



まず傷んだ茅を取り除く



刈りこみ鉋で細部を仕上げる



棟が完成。道竹をはずしつつ、茅を切りそろえてゆく

茅葺屋根は、夏は涼しく、冬は温かい。茅が音を吸収するため、とても静かという特徴があります。昔は家が茅葺だったという高齢者のなかには、「外が雨でも気が付かなかった」と言う方もいました。瓦葺より軽く、釘で固定していませんので、地震の揺れにも強いとも聞きます。また、昭和44年に文化庁が行った「熊本県緊急民家調査」では、その当時でもまだ20軒以上の茅葺民家が球磨地方にあったことが記録にあり、夏は暑く冬は寒さ厳しい盆地でも長く住まれていたことがわかります。茅葺屋根は日本独自のものではなく、世界中に

屋根は下から葺いて、上から仕上げ
茅葺屋根の寿命は、20〜30年と言われますが、立地条件で大きく違います。日当たりがよく、風通しのよい開けたところであれば、雨に濡れてもよく乾いて長持ちしますが、山陰などでは、苔やカビで茅の傷みも早くなります。昔のように囲炉裏があれば、内側から煙で燻されるため長持ちしたそうです。文化財である神社仏閣の場合、天井があればその分通気も悪くなるので、傷みも早くなります。平均でも2〜3年で傷んだ茅を取り除き

茅葺屋根のこれから
新しい茅に差し替える必要があります。条件のよい土地でも5〜6年もすると茅を足す必要があります。球磨地方を含む九州地方では茅葺の棟を竹で押さえて仕上げた屋根がほとんどで、棟部分の寿命は竹材の寿命と等しく、条件の良い土地でも5〜6年から最長10年で交換が必要ということでした。



棟を押さえる棟竹をのせる。球磨地方では半分に割った竹を13本並べて編んだものが多い。棟の頂点にくる竹は「天の竹」と呼ばれる



トタン板の上に杉板を重ねる



銅線で固定する



見上げた時



コテで茅を打ち込む



棟竹の両端をのこぎりで切りそろえる



棟竹の設置が完了

前町の上米良鍛冶屋で、全国から問い合わせや発注があるとのこと。よい道具を作ってくれる鍛冶屋があつて、伝統ある茅葺屋根が多く残る人吉球磨地域は、茅葺師にとって恵まれていると田代組のみなさんが話してくれました。

あります。地球温暖化防止など環境に対する意識が進んだヨーロッパなどでは、最終的に土にかえる自然素材を使った茅葺屋根が再注目されているそうです。国内においても、平成24年に建築基準法が緩和され防火上支障がないと判断される場合、茅葺屋根の建物を建てることのできるようになりました。いまのところ、公園の一部に古民家を再現したもののヤリゾート施設、商業施設などの景観用の建物が多いのですが、グリーンツーリズム推進の一環として宿泊施設に茅葺屋根を取り入れた地域も増えているようです。住まいとしての茅葺建築も見直されています。

熊本県内では、阿蘇市の公益財団法人阿蘇グリーンストックが、文化財の茅葺屋根材料として阿蘇の草原に生えるカヤ（ススキ）の需要に注目し、商品化を進めているそうです。地元牧野の新たな収入源として確立すれば、阿蘇の草原保全にも役立つことでしょう。

現在、熊本県内に残る茅葺屋根建築の八割ほどが人吉球磨地方に集中しているそうです。それは、神社仏閣などの文化財に茅葺屋根が多いことにその理由がありま

すが、そうした地域の大切な建物の茅葺屋根を先人たちが守ってきた証でしょう。近い将来、人吉球磨に残る茅葺屋根とそれを守る茅葺師の技術が、環境にやさしい未来の建築物のヒントになる日が来るかもしれませ

【つえむら・かずよ／人吉市】

参考資料

・横枕五十雄「球磨の民家」昭和60年 有限会社協和印刷

・人吉球磨伝統文化塾発行「茅葺き小読本」（発行年記載なし）

・北野 隆「熊本県の民家資料集」平成18年 ネット資料

・松澤朋典「茅葺屋根を守る」（2014年7月11日、新川文化ホールでの講演）。富山県建築士会新川支部主催の講演会の記録で、文責者は小林英俊さん。インターネットで閲覧できる。

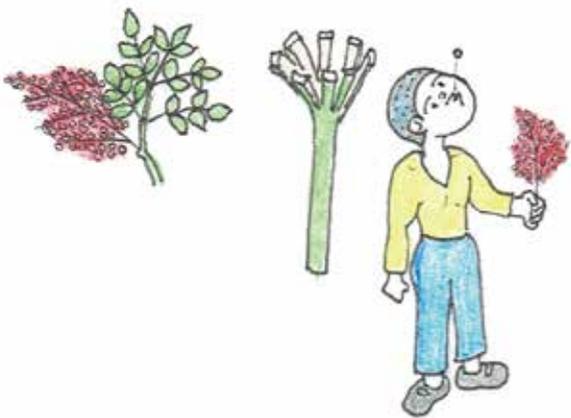
ナンテンの吹き上げ

ナンテンの実の熟れぎや始 し、我がでにや一ちよも見えん
むれば、突き鉄砲ん弾んしたつ じやったもんで、ナンテンの実
しおったが、「吹き上

げ」ちゆうて、口ばと
んぎらきやあて、そん
上んナンテンの実ば一
ちよ乗せつから、あん
こにやて（上向いて）

息ばちつとづつフーッ
て出しおれば、ナン
テンの実は、フワッて
浮き上がって上下し
ながら浮いとつたいど

んが、じきにや息の
続かんめえひなつおっ
たり実もつこけおった



よま小みんか竹ん節ば取つた
とば、コガタンで縦さみや五
分ぐりや八箇所切れ目ば入れ
て、一ちよづつ外さみや折り曲
げ運動会ん玉入れのカゴんぐ
たつふうに広げつから、そん中
きやナンテンの実ば入れて吹
けば、つこけじいにや永ごう息
の続くじゅうは上がったつた。

いまは、直角ん曲がつスト
ローのあつで、先ん方にハサ
ミで八箇所切れ目ば入れて外
さみや曲げたとん中きやナン
テンの実ば入れて吹けば、我
がでん上がつとつとん良う
見ゆつてお。

【まつふね・ひろみつ／青井阿蘇
神社・文化苑「童遊館」】

今年もやるバイ、やっさぶドラゴントレイルラン

吉田 論祐

ポスト合理主義

前回レース（昨年8月11日）から5ヶ月が過ぎた。短い5ヶ月だった。大会終了直後から、ランナー・サポーターのみなさんから「来年もやりたい」との声を怒涛のようにいただいた。「来年もやりたい」は「今年もやりたい」になって、いまもつづいている。前回大会で完走できなかったランナーからは「次回は完走する」との闘志を感じる。大会に参加できなかったランナーからは「次は必ず参加する」との意気込みが伝わってくる。それらの声は僕の身体を直撃しつづけている。

こうなったら、やるしかない。今年も「ドラゴントレイル」をやるばい。開催日は8月9日にしよう。暑い夏の日真ん中で開催しよう。

暑い日には、エアコンに助けを求め涼しい部屋で過ごす途もある。そういう商業施設にいつてそこで「遊ぶ」方法もある。そういう方法に反対するわけではないし、そうした生活が絶対的に必要な人がたくさんいることは僕も知っている。数年前ほど前から始まった「暑い日にはエアコンを利用しましょう」のキャンペーンはそれなりの合理的理由があり、僕もその

キャンペーンを否定する気持ちはまったくない。

しかし、人間の精神・思考は単純ではない。「機械的な涼しさ」を求めたのではなく、そういうときにこそ、タフなやりかたで自己の身体を使う途を選ぶ者がいてもいい。トレイルランの参加者はそうした連中だ、猛暑でも山道を走破したいと本気で思っている連中はたくさんいる。一見無謀にみえるかもしれないが、そのための準備は十分に尽くす。その準備もまた、楽しからずやだ。

機械的合理主義に入り込むだけで

はつまらない。不合理にみえることを合理的に求めるやりかたもあっていい。50キロを超える山道を走ろうというのだから厳しいにきまっている。

しかし、それをやり遂げたあとの「爽快感」は言葉にできない快感だ。体験した者でなければそれは分からない

かもしれない。僕は、多くのみなさんにそれを体験して欲しいと思っただけで、無理強いするつもりはまったくない。

文明の利器を二面的に理解し、「精神がゆるくなりつつある現代人」へのメッセージを伝えようという気持ちは

ある。屈強なランナーの爽やかな笑顔、近代合理主義が失ったものがそこにある。

前回のコースを基本にしようと思うが、「渋利砂利道」を整備するなどコースの一部は変更するつもりだ。竜峰山の復路コースを昨年よりタフ



鶴喰地域（八代市坂本町）



この看板をみて「渋利」に通じる道があるのを知った。以前は鮮明な看板だったが、いまは、分かりにくくなっている。

なコースにバージョンアップしたいし、東陽町から氷川町にかけての立神峡の釣り橋と地藏堂のトレイルを追加しようかとも思う。いま、昨年のコースのバージョンアップに向けて頭の筋肉を鍛えている。

環境問題

走るだけでなく、僕たちはトレイルランのために山道を整備している。マランレースのようにランナーの「速度の速さ」を目的にしているわけではない。トレイルランは自然を楽しみつづ自然に身体をゆだねるスポーツで経験が力を発揮する。決して危険・刺激を求める行為ではない。身体を鍛えなければ実行できない。それはどのスポーツにもいえる。

コースを「整備」をしなければ鍛

る。鹿でなく、人間に問題があるようにみえる。

限界集落を元気にする

坂本町で恐竜の化石が発見されたこと、坂本町を含め八代地方には「竜」のつく名前の山が多いこと、気づき、「ドラゴントレイル」を計画・実施したが、もともとの出発点は坂本桃子さん（「桃ちゃん」と呼んでいる）が主催した「日光棚田フットパス」（2018年3月11日）。坂本町の



渋利地区から八竜天文台に向かう途中の道。年末に開通させた。倒木や落石が激しく開通させるのに苦労した

えた者でも怪我をする。そういう事態は回避しなければならぬ。それはどのスポーツにもいえること。トレイルランでは山道の「整備」が準備行為のひとつになる。そのなかで自然環境の「悪化」も感じるようになる。

たとえばペットボトルやプラスチックゴミの不法投棄が目立つ。拾っても拾っても不法投棄物が出てくる。山中に捨てられているのだ。山中だけでなく球磨川流域にも捨てられている。これらのプラスチックゴミが河川に流れ込むと、回収は至難の技である。そして、プラスチックは地球に還れず海の生き物の生命活動に大きな問題を生じさせている。

このままでは地球はダメになる。僕たちの小さな努力では「焼け石に水」で、どうにもできない段階にいたつて

山中に「日光^{ニチコウ}」という地区があつて、その地区を楽しもうというイベントで、日光地区でいただいたお茶と食べ物に実に美味しかった。

孤立しているようにみえる日光地区だけでも、昔は別の集落とつながる古道があつて、各集落は古道でネットワークのようにつながっていたにちがいない。古道がなかったのなら道をつくって集落と集落をむすびつけるトレイルランができればいい。桃ちゃんのフットパスに参加して、そう思った。



東陽町の名峰・居鷲岳。低山だが写真映えが素晴らしく、北アルプスの3000米峰に登頂したような写真を撮る

いる。根本的には政治の力で解決せざるをえない。トレイルランを通じて、そのことに警鐘を鳴らし、世論をリードしていきたい。

次に鹿の食害。山に入ると鹿が急激に増加しているのが分かる。鹿を目撃しなくても、木の皮を食み下草を食い尽くしていることは誰にでも分かるだろう。鹿によって倒木が増え、下草がなくなり、鉄砲水・土砂崩れが発生しやすくなっている。下草のない土地に雨が降ったらどうなるか。クツシヨンがなくなつて降雨は山の表面を削りとり災害の原因を作り出す。地下水になる途をなくし水の道をなくす、僕たちは、山を整備しながら、駆け抜けながら、否応なしにそれに気づく。「鹿の食害」というけど、鹿は餌に困っているのだろうと同情す

10年後、20年後には消滅してしまいかねない集落ばかりだが、消滅するとは限らない。そうした集落が元気になるって欲しいと思うのだ。それもトレイルランを計画した理由のひとつである。

★前回大会については、つる詳子さんに記事を書いていただきました。本誌42号3頁以下に載っていますので、ご覧ください。トレイルランについての吉田の考え方については上村雄一さんにお話したことがあります。それについて

あります。それについても本誌42号10頁以下で「対談」の形で掲載していただきました。

【よしだ・ゆうすけ／八代市植柳町】

住みたい田舎ランキング2019 から人吉・球磨の未来を考える

人吉市医師会 会長 岐部明廣



その①

2019年2月号「田舎暮らしの本」(宝島社)が移住先選びに最適と銘打って「住みたい田舎ベストランキング2019」を発表した。これは人口10万人以下の小さな町に限定のランキングだ。

【総合部門】

- 1位 大分県豊後高田市
- 2位 島根県飯南町
- 3位 大分県臼杵市
- 4位 富山県南砺市

- 5位 山梨県北杜市
- 6位 兵庫県養父市
- 7位 千葉県いすみ市
- 8位 長野県辰野町
- 9位 宮城県栗原市
- 10位 兵庫県朝来市

【若者世代が住みたい部門】

- 1位 臼杵市
- 2位 大分県国東市
- 3位 島根県飯南町
- 4位 千葉県いすみ市
- 5位 豊後高田市

【シニア世代が住みたい部門】

- 1位 臼杵市
- 2位 長野県辰野町
- 3位 豊後高田市
- 4位 千葉県いすみ市
- 5位 兵庫県養父市

【自然の恵み部門】

- 1位 千葉県いすみ市
- 2位 臼杵市
- 3位 長崎県五島市
- 4位 兵庫県富岡市
- 5位 熊本県天草市

総合部門1位の豊後高田市では

子育て世代(子ども)移住が伸びて、平成26〜平成30年5年連続で人口の社会増(転入>転出≧プラス)を達成。【総合部門】で第1回から7年連続で3位以内を達成。今まさに「移住の聖地」として注目されている。過疎地ではすべて社会減の中で、大分県内18市町村で、ダントツでトップの社会増(3自治体のみが社会増)。

【豊後高田市の社会増と移住者】

平成26年	95人	247人
平成27年	22人	280人
平成28年	81人	307人
平成29年	71人	298人
平成30年	46人	212人

★社会増合計…315人/5年間
 ★移住者合計…1344人/5年間

直近平成29年度の移住者で最も多いのは30代、続いて20代、40代の順となっている。

つまり豊後高田市では生産年齢人口の減少を移住者が最小限に抑えている。

島根県立大学教授の藤山浩氏は過疎市町村では人口比1%の移住

者がいれば、30年後の総人口の減少を10%以内に抑えられるという試算をされた。

国による平成27年の推計では豊後高田市は30年後の令和26年には人口15709人になり、現在の人口と比較して31%減少するとしている。

しかし今のように1%の移住者がいれば、その減少を31%から10%以内に抑えられることになる。

人吉市は総合部門で第何位だろうか?

過疎化の進行する人吉・球磨の市町村も豊後高田市を参考にする価値はあると思う。

次回「その②」は豊後高田市の移住者増加対策を探ってみよう。

【きべ・あきひろ/人吉市】

今からでも間に合う二社詣り

―雑学で巡る相良、老神、青井さん―

宮原信晃

令和2年、どんなお正月をお迎えになりましたか。今回は人吉市内にある神社を、雑学を交えての三社詣りをいたしましょう。

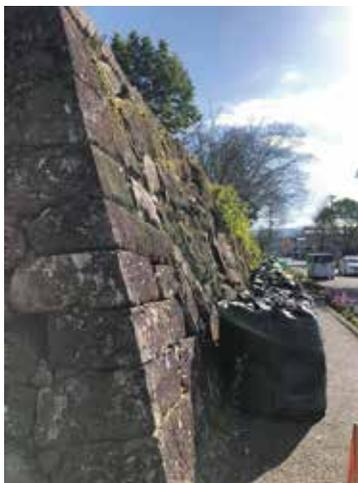
相良護国神社

人吉市の中心部にドンと腰を据える神社が相良神社。観光客専用駐車場より見える門の石段を登りましょう。黒い土嚢袋で崩れない

相良護国神社



様に抑えている石垣と、門の石垣との違いを見て下さい。あれれ、石の階段のある石垣は新しい石が使われていませんね。
これ、どういふこと？
―たぶん―この門は



清兵衛門の石垣

「清兵衛門」といい江戸時代の初期に藩の家老である相良清兵衛が登城しやすいように造った門。しかし寛永17年（1640年）に「御下の乱」があり門を閉鎖。その後の江戸時代の絵図にはこの門はないのです。しかし、大正11年に町が清兵衛門を再建。だから周りの江戸期の石垣とは違い新しいのですね。
さあ、相良神社に参拝して石の橋を渡りましょう。あれれ、この橋

は何という橋？

―調べてみたら―御館御門橋といえます。江戸中期、明和3年（1766年）に御殿様のお抱え石工、松尾喜三右衛門という石工の棟梁が造りました。山田から石を切りだしてここまで運びました。また、これを造った棟梁は他に中神



御館御門橋

町の井川の地藏さんや矢黒神社の石の鳥居も造ったのです。昔の石工の棟梁は石橋、鳥居、地藏さんも造る程に技術と信頼があったのでしょうね。さあ老神さんに行きましょう。

老神神社

人吉市内の中心を流れる球磨川に架かる大橋の南岸に鎮座するのが老神神社。参道を進み、参道のど

真ん中に八角形の石塔が皆さんをお待ちです。これは説明書きをお読みください。それよりも口を開いた狛犬さんの手前



老神神社の石灯籠

に気になる石灯籠がありますよ。これは、なあに？
―これは、たい―これは日本の歯科学の祖、ジユグリット先生こと一井正典さんが生まれた年のもの。この年は大火事があった人吉の町もお城も燃えた大事件の年。文久2年（1862年）の2月、鍛冶屋町の鉄砲鍛冶の恒松寅助さんの家から出火。西北の強風が吹き荒れ川北の町並みはまる焼け、球磨川を

越えて何と人吉城内も消失。お城のヤリも鉄砲もみんな燃えた。相良家が当地にきて、これまでで最大の大火事とか資料に。

そんな大火事でも、ここ老神社は燃えていない。その後、明治10年の西南戦争で大激戦地であったにもかわらず、燃えていない。それこそが、神がかりの史実。凄かねえ。さ、青井さんへ向かいましょうね。



石灯笼には「文久二年」の文字が

青井阿蘇神社

平成20年に青井さんは国宝になりました。正月三が日だけではなく毎日たくさんの方々が訪れます。本殿、廊、幣殿、拜殿、楼門

と5つの建物が国宝に指定され、人吉球磨に住む者にとってそれは誇りであり宝物ですね。

またしても美しい石灯笼がありますよ。楼門の前に、ドドンと両脇に



青井阿蘇神社の石灯笼

構える石灯笼。これは、なあに？

— スッキリお答えを —

お殿様のお抱え石工、松尾傳六作。この人は人吉球磨の各所に石の鳥居を建てていて、資料には「ほか多数」と書かれている。しかし調べてみると、諏訪神社（幻の神社といわれるお城の真向かいの神社—写真のみ残る）、球磨村の神瀬にある住吉神社の石の鳥居、上原田町の堀

におられるとても大きくて美しい地藏さんなど、当時は一番力のあった棟梁だったことがわかるお方。青井さんの傳六の石灯笼を触ってみて下さいね。

さんにお尋ねくださいませ。

【みやらはら・のぶあき／FBお地藏さん調査隊代表・人吉おおくま座の会事務局】

さて、拜殿にお詣りしたら、ぐるりと本殿の後ろにも回ってみましょう。本殿の後ろの壁に大きく「X」の印あり。

これなあに〜？

一世の中にはお答えできないこともあるのですよ。ふふふ〜知らないでよいこともある神社の秘密。どうしても知りたいときは、溝下昌美さんや益田啓三



石灯笼には松尾傳六名が



謎の「X」の印

塩屋八幡宮をあるく

森山 学



写真① 参道から見た社殿。左右に稲荷神社、金刀比羅宮の鳥居

先月号では、八代の本町三丁目アーケード付近の養林寺と善正寺を紹介した。今回は、その本町三丁目アーケードから、さらに西へとまっすぐ進み、本町四丁目、さらに八幡町へと向かう。アーケードから三〇〇メートルほど。ここに塩屋八幡宮(写真①)がある。近くには東塩屋と中塩屋のバス停がある。

加藤正方が八代城主だったころ、地震で倒壊した麦島城に代わり、現在地に八代城を移し(元和八年一六二二)、あわせて球磨川から海岸にかけて長大な堤防を築いた。その

うち、海岸線に沿う堤防は「潮塘」とよばれる。そこに塩浜が形成されやがて製塩業など海浜に関わる人々によって町が形成される。

塩屋八幡宮はこの旧「塩屋町」にある。いまの「八幡町」という町名は、もちろん、塩屋八幡宮に由来する。

神社の創建は、細川三斎が八代に入城する際(寛永九年一六三二)、宇佐八幡宮の分霊を勧請したことによる。転封前の中津から神石を運んで、潮塘に安置したと言われる。そこは、「八代郡誌」によれば、中世の八幡神祠があつた跡とのこと。

三斎亡き後、八代城主となつた松井興長は、明暦元年(一六五五)、八代城の南西、裏鬼門にあたる現在地にこれを移した。もとの社地はいまの若宮神社にあたる。祭神は八幡神と同一とされる應神天皇、神功皇后

仁徳天皇、武内宿禰公。

八代の旧城下町には様々なお祭りがあつたようだが、その一年を締めくくるのが、十一月二五日に開かれる塩屋八幡宮祭と言われている。また八代妙見祭の神幸行列では、ここ塩屋八幡宮が御旅所となる。



写真② 八代妙見祭のときの塩屋八幡宮



写真③ 鯉の木鼻。左上に牡丹の降懸魚

さて、それではいよいよ塩屋八幡宮を歩いてみよう。

境内は鳥居によって東に開かれ、社殿も東を向いている。鳥居正面に拝殿、その奥に幣殿、本殿と続く。

参道沿いには八代市名木の楠や、母乳の出がよくなるなどの言い伝えが

ある「乳房銀杏」がある。さきほど述べた晩秋の祭りの時期には、境内の銀杏が祭りの風景を黄色く彩る(写真②)。乳房銀杏の近くに昭和四〇年(一九六五)奉納の一对の

狛犬がある。右の阿形は玉取りの狛犬(獅子)で、左は吽形の子取りの狛犬である。子取りの狛犬は、あごひげにじゃれつく子犬を抱きかかえている姿で、乳房銀杏にもふさわしい。

それでは、まず拝殿であるが、棟札から、慶応元年(一八六五)の建築であることがわかっている。入母屋造妻入、正面に向拝(建物正面の屋根が伸びた部分で、この下で礼拝する)がつき、左右には庇がついている。木部は全体に伝統的な彩色である丹塗りの色合いで塗装されている。拝殿で目を引くのが、向拝の彫物である。

まずは向拝柱の木鼻であるが、これはユニークな鯉である。鯉は波間を跳ねながら、柱の中を正面から側面へ、または側面から正面へと泳ぎ抜ける(写真③)。

次いで手挟(向拝柱と垂木の間に



写真⑦ 本殿の向拝



写真⑧ 本殿の妻

は、正面の屋根だけが長く伸びる流造、幅が三間ある三間社である。銅板葺きの屋根には「置千木」と「勝男木」とよばれる部材がのる。正面の屋根が長く伸びた部分が向拝（写真⑦）であるが、通常、軒下空間である向拝の両側面に壁が張ら

れ、屋内化している。その向拝柱の木鼻には、獅子鼻、象鼻が用いられ、柱の上の組物は「連三斗」とよばれるもの、手挟は菊が題材となっている。降懸魚は十六菊紋である。身舎の妻（写真⑧）には華美な装飾はない。組物は、一段せり出してい

虹梁の上に組物に乗せて、もう一段虹梁を乗せる。その上に大瓶束を乗せて棟木を支える。二重虹梁大瓶束のかたちである。社殿の右手には金刀比羅宮、左手には稲荷神社がある。どちらにも朱塗りの鳥居が立てられていて、社殿の左右対称を補いつつ、ともに彩色豊かな風景をつくりだしている。

【もりやま・まなぶ／高専教員、一級建築士、八代市】



写真④ 葡萄にりすの手挟



写真⑤ みかんに猿の手挟

ある部材)。右の手挟は葡萄にりす（写真④）。りすはネズミに似ており、葡萄は多くの実がなることから子孫繁栄をあらわす縁起がいいものである。塩屋八幡宮のりすは、なんだかカンガルーのようにも見える。

左の手挟はみかんに猿である（写真⑤）。みかんは不老長寿をあらわすもので、特に八代では、田道間守

が景行天皇に橋を持ち帰り、高田みかんの由来となった伝承から、なじみ深いテーマである。

向拝柱が受ける桁の木口を隠す降懸魚には、左手に牡丹、右手に花桐が彫られる。内部（写真⑥）を見てみると、床は張られていない。歴史を感じさせる

天井は、格子状に組まれた格天井である。ひとつひとつの格間に草花が描かれていて、いわゆる一間一花の天井画である。その先の幣殿で上段となり床が張られる。正面に本殿の木口階段が見える。

その本殿であるが、享保十九年（一七三四）に火災に遭い、その後再建されたということである。形式



写真⑥ 拝殿内部



同級生との長崎旅行。旦那さん（謙ちゃん）と、よか女ごたち（令和元年11月10日）



上杉芳野の「あがつ段」④③

我が家の旦那さん

皆様、明けましておめで
とうございます。

育ての母親が亡くなり、
主人の父が亡くなり、二年
続けて喪中でしたので、「お
めでとうございます」が言
えませんでした。

今年は大きな声で「おめ
でとうございます。今年も
どうぞよろしくお願いいた
します」と言える喜び、「く
まがわ春秋」に原稿を書け
る喜び、皆様に読んで頂け
る喜び、今年は喜びからス
タートしました。皆様には
「初笑い」を届けさせて頂
きます。

「笑う門には福来たる」
という諺にある様に、皆様

にとつて今年
一年が、とて
もいい年とな
りますよう、
お祈りいたし
ます。

昨年十月
十九日、テレ
ビを観ている
と「チコちゃ
んに叱られ
る！」という
番組の中で、
五歳くらいの
女の子のキャラクターが何
でも教えてくれるのですが、
「どうして旦那さんと言う
のか知っていますか？」と
の質問に、ゲスト回答者
とに、お前ばっかりぞ、謙



昭和25・26年生まれ同級生の集まり「にごろ会」のメンバー。私たち夫婦揃って同級生

ちゃん謙ちゃんと呼ぶと
は」と言った途端、チコちゃ
んが答を発表した。
「旦那さんと呼ぶのは、
お金や物をくれる人だから
です」との答えを聞いた私

は、主人の方を向いて「ほ
んなら、今のまま謙ちゃん
で良かたい。お金も物も何
もくれんじやっで」と言
うと、主人は聞こえなかつ
た振りをして黙っていました。

春秋にも書いてんない」と
言う娘に、「うん、今から
旦那さんと言う。くまがわ
春秋にも書くこうと思って、
ノートに下書きしたった
い」と言い、その日は「旦那
さん、電話よ〜」「旦那
さん、お客さんよ〜」「旦那
さん、ご飯よ〜」と、
丁寧と呼んだ。主人は「う
ん」「うん」と言うだけ
で、何も反応もありません
でしたが…。

聞きますが、我が家は何
もありません。
しかし、どこそこに送っ
てくれたり、剣道の子供達
の育成に一生懸命の姿に、
金や物以上のものを頂いて
います。

私はおかし
くて、おかし
くて、笑い転げたい
程で、心の中
で「チコちゃん
に叱られる！」という
番組の中で、
五歳くらいの
女の子のキャラクターが何
でも教えてくれるのですが、
「どうして旦那さんと言う
のか知っていますか？」と
の質問に、ゲスト回答者
とに、お前ばっかりぞ、謙

仕事から帰っ
てきた娘にこの
事を話すと大笑
いし、「お母さ
んも今日から旦那
さんって言い
ない。くまがわ

我が家は今まで通り、謙
ちゃんが良いんです。声に
出しては言いませんが、「い
つもありがとう。感謝」で
す。
【うえずぎ・よしの／ボランティア
観光バスガイド、あさぎ町上】

雑感 — 「岬詣」の探旅

みさきもろうで

富永和信

私には、他人様に自慢できるものではないが二、三の趣味がある。その一つは地域に埋もれた歴史や史跡の探訪、次は離島や辺地にある岬と灯台の探旅である。

友人達は「岬趣味」とは、ゲテモノ好きの変人扱いである。

「岬」は広辞苑によれば「海中または湖中に突き出た陸地のはし」とある。要するに人が容易に寄り付かない陸地の突端部分である。漁業や海運の盛んなところの岬には必ず灯台が設置されている。そう言えばその昔、「喜びも悲しみも幾歳月」という

が半減しているのは寂しい。

北海道の岬は、季節によって全く違ってくるが、東北・北陸を除く全国どこの岬に比べるべくもなく、岬突端を吹きすさぶ風雪、岩崖を襲う激浪は凄まじいの一語に尽きる。

風が強いと言えば、沖縄県宮古島の東平安名崎も凄い。天気晴朗にして波穏やかな時は、その全景は沖繩を代表する絵葉書になるような美しい岬である。私たち夫婦が平成二十九年の正月に行った時は、小雨の吹きつける岬灯台を襲う猛々しい

映画があつた。若い夫婦の灯台守（海上保安官）が灯台の灯を命懸けで守る姿に感動し、涙したのを憶えている。

私の岬詣のとは誠に単純で、未知なるものへの素朴な「好奇心」と「あこがれ」の延長である。

九州のど真ん中の田舎育ちで、子供のころからあの山やこの岬の先に何があるのだろうか、どうなっているのだろうか、との思いが強く、行きたいところまで行つて、この目で確かめない気が済まないところがあつた。最近、いつも女房同伴で、彼女が

強風雨と突先の岩に激突する波は北海道襟裳岬のそれに劣らなかつた。

それだけでなく、東シナ海流と太平洋の黒潮が岬前でぶつかり合う怒り狂つたような白波は、まさに圧巻であつた。地元の人はその舟で近づいてはいけなさと、代々言い伝えているほどである。

今回の納沙布岬は、冬季に入った十一月であつたが、異常気象の故か驚くほど暖冬で、北海道の海にしては穏やかであつた。岬に立つて目の前を見渡せば、すぐそこに歯舞の島が、さらに島の中ほどに白い屋根の建物まで肉眼で見えるのである。

数年前、知床羅臼から見た国後島もすぐ近くに在り、これらの島々は根室と知床両半島に抱かれているようである。

岬嫌いでないのが何よりで、旅程の一角を占めている。

令和元年の岬詣は、十一月に北海道根室の納沙布岬であつた。北海道はすでに宗谷岬、知床岬（徒歩で行けない）、襟裳岬に小さな足跡を残しているが、北海道へこれが最後の旅になるだろう。

岬にはそれぞれ違った特長があり、それがまた興味をそそのものであるが、人を魅了する共通点がある。それは俗世の生活圈とは違った、人が近寄りがたい聖域圏のような気がする。

岬は風雪雨が強く、その過酷な自然の猛威に無言で耐えている孤独然としているところが素晴らしい。しかし今や全国的に地域観光の目玉となつて、ギリギリのところまで車道が出来て便利になつたが、岬本来の魅力

平成十年代までは国を挙げて、北方四島は我が国固有の領土であると、声高に四島一括返還運動が全国的に盛り上げていた。しかし現在は外交上の理由で声をひそめ、歯舞色丹二島返還要求さえ火が消えたようである。

そんな中で、ここ根室納沙布岬だけは返還運動の看板を下ろさず悲願達成に向けて頑張っているのを目の当たりにして一瞬胸が熱くなった。

当納沙布岬の地には歴史の表には出ていないが見落としてはならない史実がある。それは「クナシリ・メナシの戦い」である。岬に大きな「寛政の蜂起和人殉難墓碑」が建っている。これは江戸寛政時代、蝦夷全地域を松前藩が管轄していた当時の藩の役人や、その管轄下で商いをしてきた

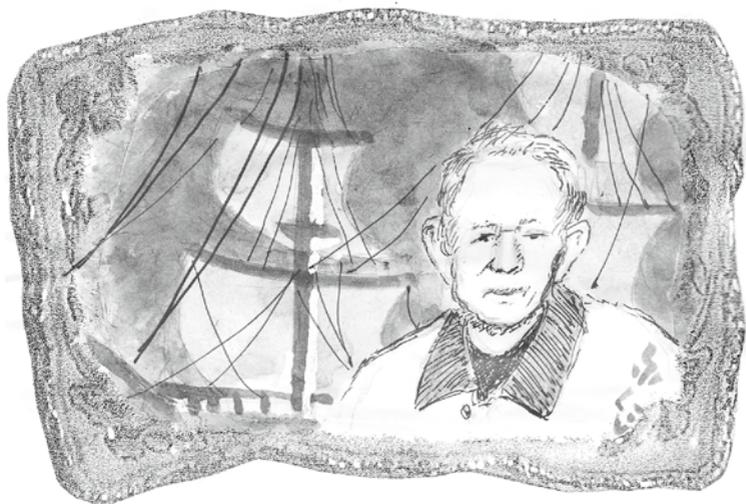


令和元年 11月

記憶の落し穂

その ④5

絵と文／坂本福治



「黒船前夜」

『黒船前夜』(渡辺京二著)が大佛次郎賞を受けた時、若き日に大佛家に居た者として祝状を送った。すると大佛次郎については是非書いて欲しいとの返事が来た。大佛宅に行くことになったいきさつのほか、頭に浮かぶことをかき集めようとして書き、二十五枚の原稿を送った。それが、「道標」という雑誌に掲載された。大佛家の跡取りの姪さんに、「私は何も聞いてないわね」と言われはしないかと思ひ、コピーを送った。何と、丁度大佛次郎没後四十年だったのである。「印刷では展示できないから、もう一回原稿用紙に書いてよ」とのこと。鎌倉に近い友人達に知らせたら、何枚か大佛次郎記念館での展示の写真が来た。原稿は保存されることになった。去る十二月十五日、大慈禅寺で渡辺京二先生とバッタリお会いした。初めてである。先生は連れれの女性に、「この人は大佛次郎の書生だった人だよ」と。お二人は素っ頓狂な声をあげられた。私は「わが人生今日までで良し」という気分になった。

【さかもと・ふくじ／画家、人吉市】



「寛政の蜂起和人殉難墓碑」(右)と案内板

和人達の、先住民アイヌに対する暴力圧政に耐えかねたクナシリ・メナシ地方のアイヌ百三十人が蜂起して役人・和人七十一人を殺害した事件である。

松前藩は直ちに二百六十余人の武士を派遣し、鎮庄。蜂起に関与したアイヌの指導者三十七人をノッカマツブ(納沙布)にて処刑した悲劇。

この大きな和人殉難碑から少し離れた場所にひっそりと一枚の案内板が立っている。それは前述の和人を襲ったアイヌ蜂起の遠因を記した文で、その概要は次のとおり。

「江戸寛政時代、現地を管轄していた松前藩の役(番)人や、その庇護のもとで当地の生活と経済を支配していた和人(商人)は、アイヌを過酷な扱いで苦しめていた。そんな状況の中、和人が与えた食べ物でアイヌが死んだことがきっかけで、これまでうっ積していた不満が暴発し蜂起に至った」とある。

私はそもそも温和なアイヌが蜂起

した事に疑問を持っていたが、この案内板が真実を教えてくれた。

納沙布岬は我が国の最東端に位置しており、納沙布のご来光を見ずしてこの岬は語れないと言われている。ここ根室に二泊したが、旅程の都合で日本で一番早い朝日を拝することが出来なかったのは残念の極みであった。

しかし当岬では愉快な思い出があった。岬で老舗の食堂兼土産物の店に入つて店内の貼り紙の文字を見て目をむいた。なんと英字で「マネー・イズ・オンリー・キヤッシュ」とある。店の主人に聞くと『キヤッシュレス』は駄目だ。現金に限る」と、小生も全く同感ですと言って、乗せられて余分な土産物まで買ってしまいました。

【とみなが・かずのぶ／山口市】

今、君の瞳は輝いているか

谷口巳三郎物語 ①

上村雄一

医師中村哲は、アフガニスタンに渡り難民の医療行為に従事し、同地の疾病・貧困の根底に水不足が存在することを知って灌漑施設の整備に力を注いだ。彼の突然の不幸から2ヶ月近くたち、彼の業績・志を考えているのだが、そのとき、故谷口巳三郎のことがくりかえし頭に浮んでくる。巳三郎は農業支援のためにタイ北部に赴き、そのため尽力しながら同地の最大の課題であった工



谷口巳三郎

イズ問題にも取り組んだのであった。巳三郎を考えるととき中村哲を思い出し、中村哲を思うとき巳三郎を考えてしまう。二人の行動は同

いでなく、二人は、その性格を異にするのだが、僕の頭のなかでは二人は結びついている。

巳三郎については、中村哲との関係だけでなく、坂本の製紙工場を考えるうえでも欠かせない人で、いつかは検討しなければならぬ人物である。それは製紙工場の所在地であるにもかかわらず、旧坂本村の住民は旧来の伝統文化をいまでも伝えていく理由を考えるととき欠かせない存在だからである。工場がある地域では工場の文化が生まれ、その文化は旧来の土地の文化を衰退させていくが、旧坂本村では、必ずしも、そうならなかった。山間部のムラ・坂本の人々が農業労働に従事していたこと自体が一見すると不思議にみえるほどである。それは、旧坂本村は社会構造の分析にかかわるとともに、そのも

とで、どのような精神文化が育まれてきたのかという問題につながる。簡単な課題ではないが、巳三郎を通じて、その課題に少しでも近づこうと思う。

工場と焼き畑

明治31年（1898年）11月1日、坂本の製紙工場は本格的に稼働を開始し、その後、同地の経済を支えた。工場周辺は、映画館、演劇場、料亭「友恵屋」、パチンコ屋、労働者たちの呑み屋、ラーメン屋などが林立する繁華街になった。昭和2年（1927年）のある筏師の断片的日誌が残っていて、それを読むと、筏師たちは工場周辺を一種の町と理解していたことが分かる。彼らは、旧八代市まで筏を流したのち、八代駅から汽車に乗車し一度坂本駅で降り同地で買い物をした。旧八代市で焼酎を飲み、坂本でも飲んだ。そのあと、ふたたび汽車に乗り自宅に戻っていた。筏師だけでなく、川船頭たちも同様であった。工場は労働者を集積させる場所だが、そのことを通じて、労働者を地域（共同体）から引き離し、工場に組み入れて、自給自足的共同体を解体し、

貨幣を媒介にする商品交換の世界をつくりだし、ひいては、その土地の伝統的文化を消滅させる方向にむかう。一般的傾向としては、そのように要約できるだろう。

小山勝清『或る村の近世史』はそれを哀しい形で、都市生活者の論理と田舎（相良村晴山）の論理を対比させる方法で描いている。出稼ぎにでてハイカラになり、ハイカラ姿で帰省し、ハイカラ文化をムラに持ち込み、その土地にハイカラ文化を植え込む状況を彼は書いたのであった。自給自足的な心性と、それと異なる心性とが衝突し、最終的には前者が勝利していくが、それもまた勝清の描いた世界であった。当事者が自己の姿の変化を自覚することは難しい。だが、それでも、人は都会にでることと自己を変化させている。『或る村の近世史』はこの問題を描いた作品で、くりかえし読まれるべきである。

ところで、坂本の製紙工場周辺では、工場労働と併行して、「焼き畑」が行われていた。工場労働の副業としてそれをこなっていた者がいたし、林業を家業としながら「焼き畑」に従事する者もいた。紙の原料として木材に注目があつまるとつれ焼畑もそれまで以上に盛んに

なった。製紙工場は自然発生的にできあがったのではない。自給自足の土地に、「上から」、突然に建設された外部的存在であった。そのため、工場労働と焼畑労働の併存は避けられない帰結であった。

「焼き畑」に従事する者には「ぶげんしゃ（分限者）」もいた。焼畑は山の存在を前提にするが、「山持ち」は「ぶげんしゃ」の別名であった。昭和40年代初頭までそうであった。「山持ち」の子が会社に勤めるなど論外とされていた。焼畑は五木村や、旧泉村五家荘が有名だが、坂本でも盛んにおこなわれていた。高い煙突から煙が流れ出し製紙工場特有の異臭のする場所、人が機械労働に従事している場所の近くに「焼き畑」を営む者がいたのであった。

明治41年6月10日、柳田國男は坂本駅で下車し、製紙工場を見学したのだが、そのとき彼は、工場付近で焼き畑が盛んであることに注目し坂本を「焼き畑」の土地と評している。彼の目は確かであった。

決して長くはない。彼よりも長い距離を歩いて通学していた生徒はたくさんいた。球磨川左岸の子どもたちは川舟を利用して通学していた時代である。

小学校の成績は優秀だった。5年生のとき肋膜炎を患い、一年遅れて旧制八代中学（現在の八代高校）に進学した。片岩から坂本駅まで歩き、汽車で旧八代市まで通った。

巳三郎は他人にやさしい少年であった。自宅近くの薬師堂に「かんじん（勸進）」が寝泊まりしていると、彼は「かんじん」を自宅に泊めようとしたという。あるいは、握り飯を渡してもいた。「かんじんの子とは遊ぶな」という



巳三郎の生家。長男の満男が生家を継いだ。しかし家業の林業は継がず、満男は小学校の教員として八代郡内の各校で教鞭をとり校長として定年退職。旧坂本村の広報誌の「一筆啓上」欄を執筆するなど旧坂本村の文化活動に貢献しつつ悠々自適の生活を送った。弟の巳三郎について語ることは少なかったと聞く

ぶげんしゃ（分限者）の子

谷口巳三郎は、大正12年（1923）11月1日に工場近くの片岩地区（八代郡上松求麻村片岩）で、忠平とサノの二男として生まれた。兄のほか、姉、妹、弟2人がいる。谷口家は山を持つ「ぶげんしゃ」であった。山は同地だけでなく、鮎婦地区（八代郡下松求麻村）近辺にも持つていた。巳三郎の少年時代には、谷口家は鮎婦の地で焼き畑をおこなっていたらしい。生家のある片岩地区は製紙工場にあまりにも近く、工場や家屋等の火災をひきおこす危険があったほか、山も焼畑に適していなかった。

巳三郎は、細身で、身体は必ずしも丈夫でなかった。それでも家業の手伝いや焼き畑の作業をこなしていた。生家前を流れる鮎婦川（油谷川）で蟹や魚を捕り、それを食していた。「ぶげんしゃ」の子でもそうした労働は義務として意識されていた。自宅から約5キロ離れた藤本小学校に通った。多くの子どもは通学の途中にある崇光寺で振る舞われる菓子を楽しみにしていたという。巳三郎もおそらくそうであつたらう。往復10キロの通学は

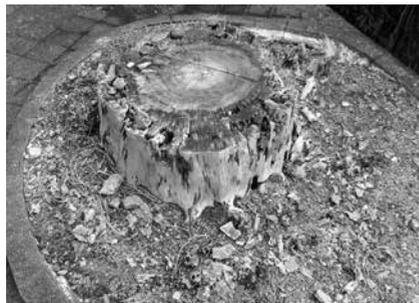
言葉が生きていた。

しかし、それは「ぶげんしゃ」の子どもでなければできない行動であった。たいの者は自己の生活で精一杯で、「かんじん」に施しできるほどの力はなかった。八代中学時代の巳三郎のあだ名は「カンジー」。インド独立の父の「カンジー」であった。

旧制八代中学校卒業後、「神宮皇学館」に進学した。しかし、一学期で退学している。同校の



片岩の薬師堂



銀杏の木の跡

堂守は谷口家。この薬師堂に「かんじん」が寝泊まりしていた、堂内には大きい銀杏の木があった。落ち葉の処理に困って満男が伐採した。具体的作業は亀田英雄がおこなった

校風が彼に合わなかったという。翌年の昭和18年、鹿児島高等農林学校（現在の鹿児島大学農学部、以下、「鹿大農学部」と略記）に入学した。百姓の勉強をするため農学部を選んだかは確認できないが、結果的には、彼の進路を決める重要な進学になった。ただし、入学直後に学徒動員で予備士官学校に入れられてしまう。巳三郎は日誌に予備士官学校の教育を批判する文章を書き謹慎五日の処分を受けている。教育批判は上官批判で決して許されないが



鮎帰川。製紙工場の上流地点。そのため清流である。巳三郎少年は、鮎、蟹などを捕り、それを食べていた

て許されないが軽い処分ですんだ。そのことが関係しているのか、南方戦線に彼は送られている。復員後、「鹿大農学部」に復学し、昭和23年に同校を卒業した。彼の後日談

によると、南方戦線での体験が「助けを求めている者を救う」という人生哲学を彼が身につける要因になった。

悲惨の涙

「鹿大農学部」卒業後、谷口は長野県の八ヶ岳の農業実践大学校で、「百姓になる」勉強を本格的に始める。夏期休暇には東北各県の農民道場（現在の農業大学校）を歴訪するなど積極的であった。子ども時代の真面目な性格を反映しているとともに、「百姓を仕事にする」と彼が決めていたことにもよるだろう。それは、百姓が儲かるからではない、それどころか儲からないことを知ったうえで百姓になることを彼は選んだ。「農業なしには人間は生きていけない」と彼は考えたのであった。彼は、こう云う。

「私は若い頃から『熊本県八代郡の有明海沿いの干拓の昭和村での農民教育家の聖農』と言われていた、松田貴一先生の様な道を歩きたいと、憧憬を持っていた。私は八代郡の旧坂本村の寒村の農家の二男で、小中学校を通じて谷川沿いの傾斜地で、焼畑農業をやっていた父母

の手伝いを良くやったものである。従って、農業はどう言うものであるかを十分知っていたし、私なりの哲学を持っていたが、それは『農業とは労多く、報いの少ないもので、平均して貧しく、人々の嫌いな職業である』と言う認識であったし、それは今も変わっていない。

然し、人間は農民が作った食料で生きなければならぬ。だから農業と言う職業は誰かがしなければならぬ。そこで、農業の道を進むことになった人間は、嫌々やるのではなく、自ら努めて農業の良さを見付け出し、使命感を確立しなければならぬ。そして農業という職業は、本人の努力次第でそれが出来るのである。そこで



鹿児島大学農学部。巳三郎は母校でいづか講演をおこなっている

農村の指導者は、先ず自分自身がその人生観を確立し、若人をそこへ案内し、引き込まねばならないのである。それが出来ずして農民となるならば、農業と言う職業は最も劣悪な職業となろう。そこで私は学校を卒業して今日まで一貫して初志を貫き、今80歳を過ぎて猶現役農民である。然し、そして、私の努力の結果は、私が死ぬ時に悲惨の涙の中に幕を閉じることであろうと思っている。」（谷口農業便り47号。2005年10月7日執筆。巳三郎はこのとき81歳）

平成23年（2011）12月31日、巳三郎は世を去った。そのとき、彼が「悲惨の涙の中で幕を閉じた」だろうか。それは本人でなければ分からないが、上記の言葉は泣きたくなるほどに重い。しかしながら彼は、「希望があれば瞳は輝く。希望は自ら作るもの。今、君の瞳は輝いているか」ともいう。

【うえむら・ゆういち／編集主幹】

★中村哲先生については、興野康也「中村哲さんの死を知る」本号65頁以下参照

漢和字典は面白い

29

鶴上寛治

録

〈ろくでなし〉ってどんな人？
 碌・録・録のどれがないのだからか？ 碌は《平凡なさま》、録は《くみ上げられた水のさま》で《さいわい…ふち（給与…俸禄）》、そして録は《重要なことを汲みあげて、金属にしろすこと》。重要な公文書を自分の、あるいは背後の人物に都合よく改竄したりしないように、これからは金属に記録してもらわなくっちゃ。〈ろくでなし〉はどれか？ 説明の用はなからう。

異

異形のもの——それは不気味。「異」とは《人が鬼やらいの時にかぶる面をつけ、両手をあげているさま》の象形。それをかぶると恐ろしい別人になるところから〈ことなる〉の意味に。異才・異色では、異なるだけでなく〈他にすぐれて優秀な〉という意味合いが加わるが、異物・異臭・異心などにそれはない。

鋏

「夾キヨウ」は《手を広げて立つ人の両脇を左右から手で挟むさま》で、挟・峽・侠・狭などを形作っている。金属で作られた《はさむ道具》が鋏。切れなくてもいいのだ。いや切れない方がいいのだ。切れたらせつかく挟んだものが落ちてしまう。それでは役にたたない。屁理屈になるが、物が切れる鋏は不良品で、良い鋏は切れてはならない。なのに、現実には切れない鋏の方が「こりやダメだ。」とされ、スパッと切れる鋏の方が「これは切れ味がいい」と高く評価される。
 外科医が手術の時に使う《はさむ道具》は鉗子とよばれている。

【つるかみ・かんじ／人吉市】

鶴鴿短歌会

平成を詠む

つれづれに三十年をふりかへる転変地変人も変りて

平成の終りを選び嫁ぐ孫未来を祈る世は穏やかに

守永 和久

平成の歌謡のメロディ懐かしく心にしみる歌詞の流れて

今年も市民健診近づきぬゆるる心で医院へ向かふ

河内 徹夫

平成に天皇拝謁夫婦して令和になりても熱き想ひが

平成に地震で壊れし熊本城勇姿見れるは令和の時か

中村美喜子

平成は無風万般よか御世と吾振り返り不満なかりし

平成は独り旅路をいく久し幾多の挫折善きに図りて

西 武喜

我が国は戦ひのなき平成にされどあちこち社会の歪み
 平成は子ども等巣立ち夫逝けど賜る命のびのび暮す

釜田 操

平成の初めに夫は天国へ悲しむ間もなく吾は病院

平成は長きに亘り大病を苦痛の連続思ひ出し泣く

三原 光代

平成は自然災害重なりて共に悲しみ復興祈る

災害のテレビ観るたび涙する吾の無力をつくづく思ひ

中原 康子

平成の元号掲げし大臣の笑顔も遠く平成は行く

手習いの三十一文字で八十路越へ歳重ねども遠き道程

橋詰 了一

平成の七年一月大地震、燃ゆる街並み死者五千余に
 街並みを津波が襲ふ映像のテレビを見つ言葉がなくなす
 同室の患者の皆の話聞く熊本地震の深刻なるを

堀田 英雄

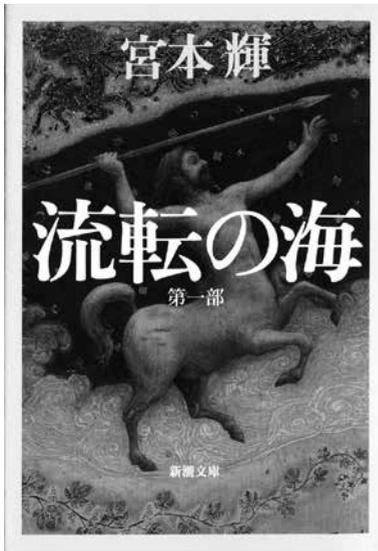
私の一冊——『流転の海』

岡村小夜子

この小説は全九巻の長編小説だが、途中切れ目なく読み進んだ。作者宮本輝氏の父松坂熊吾の生き様で人生を追及した実話である。

熊吾は戦前、愛媛宇和島より大阪に居を構え松坂商會を立ち上げるが、終戦と共に全てを失う事となる。

二年後、五十歳にして初めて息子(伸二)が産まれ、



宮本輝著『流転の海 第一部』
新潮文庫 1990年

人の親となる。早産、病弱で今にも死にそうな伸二を溺愛し、「伸二が二十歳になる迄は絶対に死なない」と自分に言い聞かせ心に刻み込む。

一筋縄ではないか会社の再興を終戦直後の混乱社会で、命をかけ必死に生きる貧しき人々の生き様が少し理解出来た。

熊吾は好色である。浮気もするし浪費もし、気持ちを表さず影を持つ妻への暴力もある。その上、人に騙され、使用人に裏切られ、お金を持ち逃げされたりもする。騙された事はあるが、騙したことはないという熊吾は、貧しき者への慈しみと情けは深い。辛苦の災難を乗り越えられたのは、これらの人の助けもあつての事だった。

妻房江は、子供を置いての再婚で伸二を産む。愛を持って育てるも、置いてきた子供への申し訳なさを抱え、引け目を抱えているし、夫に傷付き、哀しさを胸に秘め生きている。そして、アルコール依存症に陥り、苦しみと自責の

念から意を決し自殺を図る。運良く一命をとり止め、運命を感じ、自分を見つめていく中でアルコール依存症からの脱却と自分の道を探し始める。

そんな両親から産まれた伸二は、親の愛、周囲の期待を一心に浴びて育つてゆく。

幼児期より貧しき者に寄り添い、戦後の闇市、トタンやバラックの住人、船上生活者、生活困窮者、中国・韓国家族と仲良くし親を心配させる。しかし、子供をいつの時も応援する親に守られ、ハラハラさせながらも自分の道を見つけようと心身共に逞しく成長してゆく。

三人の息子は一人立ちしたものの、伸二の様な慈しみの心や苦難に立ち向かう度胸、逞しさの心を育てたかは不明である。平穏な生き方を選ぶ私は申し訳なさを感じたりもする。

さて約束の伸二、二十歳。

熊吾は、持病の糖尿病を悪化させ、脳軟化症からの失語症になる。気持ち伝えられない無念さを感じる。読む程に辛くなった。

浮気相手と生活しつつも入院する。最期は一晩中妻

の名前を呼び暴力を振り精神病院の檻の中となる。駆けつけた妻子を認め、涙を流し穏やかに目を閉じる。もつとやり遂げたかった事があつたに違いないが、自分の人生を一杯生きた熊吾に、少しの羨ましさも感じた。

人は各々の生き様があり幸福の形も二様ではない。親子でも違う。房江は、苦しみながらも自立し、笑って歩き出し、伸二も自分で自分の道を拓き歩き出した。

私は年老いた両親達程苦勞する事なく生きている。子供は親に庇護され育ち、成長と共に親に並び親を追い越してゆくものだと聞いた。果たしてこの歳にして親を追い越しているのだろうか？甚だ疑問である。

これから今迄とそう変わらない生き方しか出来ないが、人に褒めてもらうのではなく自分か納得出来る生き方をしたいし、私を追い越してゆく子供達に、「母は人生を一生懸命生きた」と言ってもらえる生き方をしたいと思った。

【おかわら・さよこ／錦町】

※『流転の海』は宮本の長編連作で、1982年より2018年の完結まで全9部として発表された。

倉敷便り

36

絵と文／原田 正史

田浦伸夫氏からの 「津軽弘前資料」

一昨年七月、宇都宮在住の田浦伸夫氏より相良清兵衛殿まがらせいひやあどんに関連する「津軽弘前資料」を送付頂きました。なお、ご承知の方もいらっしゃる事とは思いますが、田浦氏のご先祖は、清兵衛殿の津軽流罪に際して、弘前まで同行した家来五人の中の一

人であり、清兵衛殿の実子であると思われる人物です。したがって津軽でも相良氏を名乗るはずだったと思

意により、士分として召し抱えられることとなり、その際に新しい名前を与えられました。そして伸夫氏のご先祖が頂かれたのが田浦だったのです。その結果、清兵衛殿の血筋は、ここ津軽弘前の地でつがなく命脈を保つことが出来たのです。その後、定住の必要がない時代となり、田浦家は宇都宮へ転居されました。しかし菩提寺と墓地は昔のまま弘前に保持されています。先年、その墓地において清兵衛殿の小さな墓石を両手に抱いて、涙したことが昨日のことのように懐かしく思い出されます。

清兵衛殿の墓石の側には、平成二十三年四月に田浦氏と奥様の益子となり、九州は肥後人吉から最果ての地であるここ津軽弘前までやって来た罪人であつて、しかも津軽公からその人物見識を高く評価され、厚遇された、まれに見る偉大な人物であつたと、人々の記憶に留められたに違いないと思われま

様、ならびにお姉様の恵子様によって建立された暗緑色を呈する閃緑岩製の見事な墓石が周辺を圧して屹立しています。その正面には津軽公が清兵衛殿の遺徳を偲ばれて贈られた大名級の戒名、すなわち「盛徳院殿天金本然大居士」が刻まれ、側面には元人吉市長田中信孝氏による供養文も刻記されています。おそらくこの様な状況を知った清兵衛殿も、満足しておられるに違い無く、田浦氏のような立派な人物を子孫に持つたことを誇りに思つておられることでしょう。

田浦氏から送付頂きました資料は、次のようなものでした。

①弘前市相良町周辺図、②ガイド
弘前、③マップ弘前、④弘前城、⑤弘前さくらまつり、⑥あおもり観光案内図、⑦青森⇄函館、⑧五能線の資料については煩雑になるので省略します。

周知されているように、青森県をはじめ東北各県は県域が広く、一々二回の訪問では全体的な理解は不可能です。弘前を含む津軽地方に限つても同様だと言えます。この事を熟知されておられる田浦氏が、出来る限りの資料を集められ、送付頂いた訳であり、心より感謝申し上げます。なお、清兵衛殿墓参に際して持参した球磨川の砂岩磯についても、西福寺の保管所に収納頂きました。併せて厚くお礼申し上げます。

最後になりましたが御一門の益々の御繁栄と御発展を祈念申し上げます。

【はらだ・まさふみ／日本地質学会会員、倉敷市】



上空から見た岩木山と弘前市郊外（手前）

私たちからすれば弘前市民が相良町に、換言すれば我が郷土最高の英傑相良清兵衛に全く無関心なのは大変悲しいことです。その理由は、互いに住む場所があまりにも遠すぎる事だと言えるでしょう。私はより近い倉敷から新幹線と飛行機で二回弘前へ行きました。清兵衛の講演会に来い

年念し
450 誕生
下ろし
書き
生記書

小説・相良清兵衛

25

山口啓二

津軽土佐守信義公が最初に來られて半月が経ち、ようやく少しばかり暖かくなった頃、また信義公の來訪があった。この日はなにやら別の悩みを抱えておられるようだった。

「実は本然殿、今日は折り入って二人だけでお話をしたいのだが」

「はて、如何なされましたか。おい主水、九郎右衛門、お主ら殿のお供の方と城の桜の咲き具合でも見て参れ」

「は、かしこまりました」

人吉からの従者五人のうち今日は印藤主水と印藤九郎右衛門が同席していた。流人扱いの清兵衛はもちろん主水らも遠出は禁じられていたが、弘前城主の供が同行するので、二人は屋敷を出て弘前城の桜の咲き具合を見に行つた。

人吉球磨で『犬童』の姓はすこぶる多く、まったく珍しくも無いが、これを『いんどう』と呼べるのはこの球磨の者以外には殆どない。相良清兵衛の元の姓もこの『犬童』だったが、秀吉の命で朝鮮に出陣する折に若き殿の名代として『相

良』姓を賜っていた。津軽に同行した犬童主水も犬童九郎衛門も今は『印藤』に姓を変え、または『院道』となつていても弘前に残っている。

二人は信義公の従者と共に一里ほど離れた弘前城へ向かつた。往復でゆうに一刻は時間がかかる。

「して土佐守殿、折り入つてのお話しとは」

「実はでございます。余のあそここのことじゃが、病が元なのか氣遣いのせいなのかこしはらく役に立つてござらんのか。正室はもとより側室も何人かおるのじゃが、いかんせんまったくモノになりませぬ。本然殿、何かいい手立てはござらぬものかと恥を忍んで伺い申した」

「ほほう、そのお若さでなんとぞういとお悩みにござりませぬか」

「いやあ本然殿、あの秘薬ものすごいものにござつた。屋敷に戻つて言われた通り三粒飲んで、されば一刻もせぬうちにせがれが疼き出しましてな、早速事に至つたが何よりも一向に果てませなんだ。遂にはそのあと側室三人も呼び寄せ、朝までたんと可愛がつてやりましたわ。お陰でここ数日毎夜の如くお世話に相成り申した。『養野の秘薬天金丸』とはまさに聞きしに勝る妙薬にござつた。あはは、本当にかたじけないことで。ときに折り入つての相談じゃが、あの秘薬もう少し分けて戴かせぬか」

「ほうほう、それは誠にようござりましたなあ。まだここにたんとございますれば拙者すでに齢七十四、その上蟄居の身の年寄りにはもう無用の物にござるでござうぞお使いください。これでお家は安泰、いいお世継ぎが授かることで御座りませうぞ」

結果そののちも津軽土佐守はさらにお励みなされ、『秘薬天金丸』のお陰であろう、二十五人の男子と二十六人の女子をもうけられた。

信義公はその後も幾度か本然の住まいを訪ねられ、薬の製法はもろろん、易学や儒学、兵法や開墾、さらには祖父三成との昔話をしきりに聞いて帰られた。ことに朝鮮での出来



■主な登場人物
相良清兵衛（犬童頼兄）＝相良家家老
土佐守信義＝弘前藩主

「はい信義殿、我が球磨の地は、あまり知られてはござらぬが無類なる薬草の宝庫にございます。それに加え相良家の祖・初代長頼公は最初に球磨の地においでの際に薬草に詳しく者を供にして参られております。それが嵩じて今では良薬がたくさん採れてございます。さてこの薬『養野の秘薬天金丸』と申す媚薬でしてのう。そうじゃな、最初は三粒ほど飲まれて下され。しからば必ずやお元氣を取り戻されるに違ひありますまい。あとほせいぜい日に一粒ずつになされよ。元氣が出過ぎて鼻血が噴き出しまするゆゑ」

「ほほう、『天金丸』という秘薬にございまするか。それはそれは。早速試してみるとしよう」

五日と開けずまた訪れられた土佐守殿は、この日はこのほか上機嫌であった。

事にはかなり興味を持たれた。祖父三成が先頭となって活躍した戦であったからであろう。

「いやはや、本然殿の知識は驚きにござる。わが藩にもいろいろ取り入れてまいらうと。そういうえば本然殿、余がここを最初に訪ねて祖父三成の件をお訊ねした折に、そなたを陥れた人物が居たように申されたが、そういう御人もおられたか。その輩やからについてお聞きしたいのじゃが」

「あはあ、深水佐馬助頼藏殿の事でございまするかな。余り思い出したくも無い名前なれども、いろいろございましたからのう。この年になつても忘れることなどできはしませなんだ。そう、最初に会つたのは拙僧が数え十四、まだ軍七と名乗つておつた頃でしたなあ」

すでに六十年前、島津義久の執拗な攻めにより、水俣城はついに薩摩に明け渡すことになった。独りで人吉の延命院を抜け出し、薩摩軍の攻撃にさらされていた水俣城にやつとの思いで入つた軍七だったが、その後島津が三万を超える大軍勢で囲み開城を迫り、遂に十八代義陽公は水俣を薩摩に明け渡す事になったのだつた。

水俣を護つていた父・犬童頼安は城を薩摩に引き渡すと、

召され町娘相手に何をやっておられます。それこそ叔父上宗芳殿の御名に傷が付きますぞ」

と言うと、若者らはそそくさとその場を立ち去つた。軍七にとつてこれが佐馬助、のちの頼藏との最初の出会ひであつた。

その後の甲斐の堅志田や高森攻めでも共に戦う事があつたが、果敢に戦闘に加わる軍七とは対照的に、軍勢の後方で奇声を発するだけの佐馬助を軍七は嫌つていた。

それどころか、高森の戦いで惜しくも命を落とした佐馬助の従兄で軍七の師・摂津介のいなづけを手込めにし、更には先ごろ太閤秀吉の質として共に大坂に向かつた軍七の妹『鶴満』にまで言い寄つてくる始末であつた。幸い鶴満には、大友との戦で亡くなつた中間徳右衛門の息子・弥兵衛が伴をしていたので事なきを得た。

大友攻めもようやく終わり、秀吉が島津を足下に治め宗芳を薩摩川内の泰平寺に呼んで半月ほど過ぎたころ、宗芳は役宅に休矣と軍七親子を招いた。秀吉は昔北方面を宗芳に与える朱印状を渡していた。

「御家老、この度の事、誠に首尾よく事が進みましたなあ。

津奈木や佐敷があれば大坂、果ては南蛮との交易も今まで通

家臣とともに八代へと退陣する事となった。もちろん軍七もその軍団の中にいた。水俣から八代へはほぼ海岸線を進むのだが、そこには途中三つの大きな峠があり、これを越えて進むのも一苦労だつた。

ようやく八代まで引き揚げた軍七は、数日後に中間徳右衛門と連れ立って城下を見物していた。

すると前方で、屋間から酒に酔つた数名の若者が町娘を追いたて、嫌がらせをしていた。だんだんと悪行が増し、遂にその主犯格が町娘を抱きかかえ、連れ去らうとした。取り巻いていた町民の後ろにいた軍七は小石を拾つてその若者に向かつて投げつけた。小石は見事に若者の額に当たり、その傷から血がにじんだ。

「痛いっ！。おれ何奴じゃ。俺を筆頭家老深水宗芳の甥と知つての事か」

すると徳右衛門が前に進み、

「これはこれは、佐馬助殿にごさらぬか。白昼の町中で何事にござる」

まだその頃、頼藏は佐馬助と呼ばれていた。

「徳右衛門、今俺に石を投げつけたのは貴様か」

「あいや、滅相もござりませぬ。しかしこの昼間に酒など

りに事が運びます。誠に目出度いことぞ」

「本当でございます、御家老様の詠歌が相良家を救つたのですね。軍七も関白殿下の驚かれる姿を見とつてございました」

「なあに、こちらも恐縮したが、普段の心をもつて詠を披露しただけ。矢も弾も飛んで来ぬゆえな。それはそうと今日そなた方をお呼びしたのは他でもない。わしの方から伺つても聞いて貰わねばならぬ願ひがあつてなあ。呼び付けおいて申し訳ないのだが」

「さて、あらたまられて何事にございましょうや」

「実はな、摂津介が亡くなり早や二年、わしもそろそろ衰え始め申した。そこで休矣殿、たつての願ひでござる。軍七殿を我が深木家の後継ぎとして養子に迎えようござるのだが、聞いてはくれませぬか」

「いやはやこれはまた突然のお申し出、如何するかは当の軍七次第でございますが、さりとて我が犬童家も後継ぎは軍七ただ一人でございまするゆえ、せつかくのお申し出、軍七はじめ近親の者とも相談の上御返事させていただきますぬか」

「はい、父上の申す通りそのような大事なお話し、すぐには返答できかねます。まったくもつて光栄なお話しなれど、軍七も父上や母上と相談したいので、少しばかりのご猶予を」

俳句大学投句欄 ②

霜柱 (しもばしら)

「冬—地理」

鈴木玉恵

【季語の説明】

霜柱とは冬季など氷点下になる時に、地中の水分が毛細管現象によって地表にしみ出して、地表の土を押し上げて、柱状に凍結したもの。気象条件としては地面近くの気温が0℃以下、一方、地中の温度が0℃以上になる事が必要であり、土壌条件としては土壌の含水量が30%以上の場合に発生しやすいそうである。

● 霜柱踏むや足裏を耳にして

【永田満徳評】

踏みたくなるのは凝結した水分の針の形であろうか、サクサク感であろうか。掲句は「足裏(あうら)を耳にして」という表現に、全神経を集中して、「霜柱踏む」音を楽しんでいる様がよく詠み込まれている。

綿虫 (わたむし)

「冬—動物」

篠木睦

【季語の説明】

綿虫(雪蛭)は、分類上はアブラムシで、アブラムシの中の、白腺物質を分泌する腺が存在する種類の虫の通称になる。体長5mm前後の全身が白く綿で包まれたようになっている。飛ぶ力は弱く、風になびいて流れるので、雪を思わせる。雪虫とも呼ばれ、雪国では冬の訪れを告げる風物詩ともなっている。

● 陽も音も吸ひ尽しつ雪蛭

【永田満徳評】

晩秋から初冬にかけての空中を青白く光りながら浮遊する様は掲句の「陽も音も吸ひ尽し」という措辞そのものである。これ以上の措辞で述べられないほどに、脆くも儂い「雪蛭」を鋭く捉えている。

ポインセチア

「冬—植物」

大工原一彦

【季語の説明】

赤いポインセチアは、「祝福する」「聖夜」「幸運を祈る」「私の心は燃えている」で、幸福感に満ちた花言葉。クリスマスによく使用される赤・緑・白の3色はクリスマスカラーと呼ばれ、赤は「キリストの流した血の色」、緑は「永遠の命や愛」、白は「純潔」を表す。クリスマスにふさわしい植物である。

● 言へぬことカードに託しポインセチア

【永田満徳評】

「ポインセチア」は密やかな女心との取り合わせが多い。掲句はポインセチアの赤を生かした取り合わせで、赤心を「カード」に託すという行為を詠んで、「ポインセチア」の季感を生かした句となっている。

【ながた・みつり/俳人協会会員、熊本市】

「承知。摂津介が生きていればお主と互いに力を合わせて相良家にお仕えして貰いたかったのじゃが、今となってはわしが思うに軍七殿に頼るしかないのじゃ。甥の佐馬助をという話もあるが、佐馬助ではどうにも心もとない。どうかたつての願いにござる。相良家安泰のためにも良い返事をお待ち申し上げる」

「左様でござりましたか。かしこまりましたでございます。では返答は後日必ず」

二人は不安を隠しきれずに宗芳の役宅を後にし、力が入らぬまま上村への道を半日かけて歩いた。

「この軍七、御家老のお申し出は誠にもって有り難い事じゃが、さて我が犬童家の行く末も案じねばならぬ。いかが致したもののよう」

「父上、しばらくこの事は母上には内密にしようございませぬ。鶴満も先だつて大坂へ旅立つたばかりにございませぬ。母上の御心情はいかばかりか。実は佐馬助殿は私もどうも好きになれませぬ。相良軍が水俣から八代を経て帰るときですからもう四年程も前の事ですが、初めてお会いした時からあの方とはいやな因縁がございます。仲間数人とともに酒に興じて通りの若い娘を手込めにしようとするところを

丁度一緒にいた徳右衛門と出くわしました。豊後攻めの折りも何かにつけて戦陣の後ろの方で息巻いておられました。どうも軍七とは肌が合わぬお人です」

「わしもそのように見立てておつたがお主にもそう映ったか。父上の深水帯刀殿は兄上の御家老に似てなかなかのお人なのだがな。今後宗芳殿には佐敷、津奈木の領地が増えた故、そちらの御心境も察せねばなるまいのだが、当家の跡継ぎが居らぬでは話にもならぬしう。まあ、しばらく思索してみてくれ。急がずともよいと思うが御家老も返事をお待ちのようだ」

そのうちに湯前の地頭・竹下監物が深水宗芳と犬童軍七の養子縁組について聞きつけ、異議を申しつけて来た。監物は宗芳と縁故関係にあり、湯前城主として上球磨では無類の有力者であった。監物は甥の佐馬助を養子として跡目を継がせるのが一番、と譲らなかつた。宗芳は一族とも相談、佐馬助では心もとない事を説き、軍七を跡目とした旨を強く申し入れたが、当の軍七からようやく返事が来た。

【やまぐち・けいじ/人吉市】

球磨弁の接頭・接尾語①

— 元朝寄り —

前田 一洋



娘がはなし

「見たな、向かいの大将とよめごたい。みゅうととめ、きれえに祝儀ん時のごとウツ立ってばい。どけども行きやいたとじやれる」

「よかよか、ひとり方ん夫婦のごけ何しぎや行きやろが、キツ構うたことか。そいよま早うしゅちゅに爛どもつけて持って来んか」

「おまや、すぎや吞気かことサデかやすいども、あすこの三番目の娘バッチョがはなし（縁談）もキヤ決まったとげなばい。おいぎやの娘にやまだどつからだりはなし一つちよなかとこれ。しゃぐのきつてキチキツ沸く」

他人の不幸はカモの味というが、その逆たるや、腐ったカモ鍋をつつくようなものか。まして器量も十人並み、学歴もナミの向かいの娘には

正月も元日だけは静かにしているものの、二日目から親類縁者が集まってくる。「元朝寄り」が始まる。お互いに心の知れた間柄であるために、その言葉遣いも家族同然。殊に楽しいのが「ヒン飲む」「イッパチ返やす」など、言葉の勢いを強めてくれる接頭語が惜し気もなく使われること。また、「あちやキチキ」（邪魔になる）など語彙のひゅー（尻）を飾る語も。今年はそれらを楽しみましようや。

縁談が次々と来るのに、自信満々のわが娘には全然。かくて「しゃーぐのきつて（癪の起きて）キチキツ沸く」と、ダブル接頭語までもが付けられている。また娘の品位を落とすため「バッチョ」なる接尾語まで。

正月でえ

「はーらは、としかさ（お祝いの餅）やら土産もんよば、ずびやかるうたりヒツ下げたりして、もとえ（実家）さみや戻って行きおったた、正月でえ（礼）ちいおったたいな。あらいつ頃じやったかによ。おどまあん時が一年中で一番嬉しかったとばい」「じやつつろー、たしか小正月ごろじやなかつつろか。おいぎやの力かしゃんな人一倍サデ喧しか事ばかりキツかやしおつやいたで辛かつつろ」

正月行事が一応落ち着いた頃、

「正月礼」と称して若夫婦はその実家に里帰りをしていた。今では里帰りつ放し」が多いのだが、勿論一泊か二泊で帰るのだ。それにしても、何かと気苦労の多いヨメにとつては、まさに極楽に行くようなものであったに違いない。

殊にヨメの天敵である姑カクさんがサデかやされる（強い言葉で云う）小言の数々が、どれほどその心を苛んだことであろう。ただし最近はその方程式にかなりの変化が。

はじぎやん

「小正月のしゅんなめジヨの時イ、じいしゃんから弾き猿よば作つてもらうとが、おら一番うれしかったた。猿の山やのーぼれ、ちゅうて弾けば、つらのマツきやっ（赤）か猿の上ん方までヒツつう（飛ん）でばい」

「そいやら餅いにゃー（担い）猿ちゅうとも作つてもらいおったでなやじろべえのごたつとたい。そいどん、向かいのオンジヨ爺はこす（けち）タクリユーじやつたで、餅の代わりイかたし（椿）の実じやつたでまい」

一月十五日は小正月で、そのゴヤ（前夜）には爺さん婆さんが、シュンナメジヨ、アワボやヒエボ、ミヤーだごなどを作る。そのついでに子供が喜ぶ弾き猿や餅いにゃー猿も。

そして本番の十五日の夜には、もぐら打ちとか成り木責め、あるいは部落総出の綱引きなどが行なわれ、まことに賑やかであった。闇夜の元日に比べて十五夜には真ん丸お月さんがやさしい光を届けてくれたからである。

【まえた・かずひろ／人吉市】

『脱「基本高水治水」研究誌——自然の川を未来に手渡そう——』

清流球磨川・川辺川を未来に手渡す流域郡市民の会2013

森明香

前回のシリーズで『川辺川ダムはいらん！——住民が考えた球磨川流域の治水対策——』（2005・花伝社）を取り上げた際、同書を球磨川・川辺川を未来に手渡す流域郡市民の会（手渡す会）が2015年から断続的に開催する「川に学ぶ」研究会に至る、過渡期の記録だと書いた（書評シリーズは本誌41号、「川に学ぶ」研究会は本誌39号）。今回は、なぜ「過渡期の記録」なのかを二つの冊子を通して示したい。



「川に学ぶ」研究会のそもそもの発端は、民主的な議論に基づき政治責任を果たすことを重視した潮谷義子元知事の英断によって、

2001年12月に始まり9回の公開討論と森林保水力の共同検証とで展開された、「川辺川ダムを考える住民討論集会」（住民討論集会）にあった。とりわけ第2回以降、主要な争点の一つになった基本高水は、連続堤防やダムなどの近代治水工事が球磨川水系でなされるに伴って生じる弊害を生活実感として知っているがゆえに、川辺川ダム建設に反対した人びとを、学習に駆り立てた。

基本高水はダム建設の根拠となる洪水の規模を示す概念だ。球磨川水系の基本高水流量は、昭和40年（1965）7月洪水をモデルに算出され、2日間440mmの雨量で人吉地点で7000^秒とされた。ダムを造らない現状では人吉地点は4000^秒しか流下できない。だからこそ川辺川ダムを建設して3000^秒をカットせねばならない。これが国交

省が治水を理由に川辺川ダム建設を進める根拠だった。だが、これらの数値がどのような現実を踏まえてどのように算出されたのかは、ブラックボックスだった。

実際に、これらの数値への疑念を引き起こす流域での実績もあった。たとえば1995年、想定に近い雨量447mmが流域に降ったことがあるが、人吉地点で3900^秒の洪水にとどまった。また、遡ること昭和57年（1982）洪水では、人吉地点で5400^秒が流下していた。経験してきたことを踏まえれば、流域に住まう人たちが川辺川ダム建設の根拠となる基本高水に疑問を抱くのは、当然だった。

そのためダム反対住民側は、基本高水の妥当性を明らかにすべく、手渡す会をはじめ流域内外のダム建設に疑問を抱く県民市民、研究者・実務家らによる「治水班」を結成し、手弁当で情報公開請求を繰り返し学習を重ねた。開示された資料はほぼ黒塗り、専門家に依頼して出揃った基本高水の数値は全て異なる、といった事態にも直面した。そうした中、流域での生活実感に合わない基本高水を前に、算出にあたり古い計算手法が用いられているのはなぜか、昭和40年（1965）洪水時のげ山から変化している流域の森林による保水力が考慮されていないのはなぜか、疑問抱く根拠を示しながら問い掛け続けた^①。

住民討論集会での基本高水の数値をめぐる討論は、やがて最先端の研究とも肩を並べるような森林保水力の共同検証へと発展していく。基本高水をめぐる争点の一つだった森林の保水力をめぐることは、2000年代初頭にあっても1970年代の研究成果が「最新の知見」とされていた。つまり、1960年代の拡大造林を経た放置林などは各地で問題視されていたものの、森林の状態によって保水力に影響があるか否かを判断するに足る科学的データは林野庁にもなく、実地で確認するよりなかった。

2004年から始まった森林保水力の共同検証では、実験場所や方法の議論と合意に長い時間をかけた。最終的には上流の山林の一部の浸透能を示すデータをわずかに得た段階で、2005年に幕を閉じる。ただ、生活実感がゆえにダム建設に反対する住民らにとってこの経験がもたらしたものは、とても大きくかった。

実験場所の選定にあたって大雨のたびに上流域の森林を走り回っていた手渡す会の治水班メンバーは、数多の林道で地表流が生じる様子や、人工林と自然林との土壌の違いや地質の

①これらの資料の一部は、『戦後日本住民運動資料集成11 川辺川ダム建設反対運動資料第8巻』（2017・すいれん舎）に所収されている。

特徴といった、具体的な山の状態を目の当たりにしていた。走り回っていた当時は森林保水力に関する観察を重ねていると実感してはいなかったが^②、こうした経験を原資に、ダム反対住民側はその後も独自のフィールド調査を重ねていく。

2004年から球磨川流域では立て続けに、避難勧告が出されたり2日間雨量440mmに匹敵するなどの記録的な出水に見舞われた。手渡す会はその度に上流から下流まで回って冠水した地点や崩落箇所などを増水状況とあわせて記録し、雨量データや調査地点の河床状況など公的データをも用いて分析・考察した調査記録を作成している^③。また2005年洪水では、これまでになく長期にわたって川辺川の濁水が続いたことを受け、国交省と漁業者との共同調査を実施。河床土砂堆積の状況、濁り状況、崩壊箇所を調べ、最大濁度を計測したことや土砂の堆積状況と崩壊箇所を根拠に、漁業者と住民側は砂防ダムが主要な原因であるとの見解を示した^④。さらに2006年には、2004・2005年の水害被災者69戸を対象とした聞き取り調査を流域内外の住民団体が共同で実施し、水害の状況と被災した住民が望む水害対策を記録している^⑤。

これらのフィールド調査で現場を見て回り積み重ねたデータの検証は、溢れ流れながら山と海とを繋ぐ自然の構成要素と

本冊子を概観しておこう。全体のリード文を兼ねる《はじめに》では、脱「基本高水治水」という概念が住民討論集会での経験に端を発していること、流域住民が直面するダム・水害・川いづれの問題においても「基本高水」と向き合わざるを得ないと気付いたこと、具体的には一部専門家による数値の多寡をめぐる議論にとどまることなく流域住民の立場からその本質を見極めるような学習や議論の積み重ねが重要と思いつたことが、述べられる。

その上で、第一章では《脱「基本高水治水」研究会で報告された内容と今後の課題》として、今本博健・京都大学名誉教授による定量治水から非定量治水への転換の必要性、黒田弘行・手渡す会幹事による流域住民が基本高水問題にどう取り組んできたか、がそれぞれ述べられている。前者は、従来型の一定の想定を超えたら手の施しようがない治水計画を「定量治水」とし、その内実はダムに翻弄され治水計画の本質を見失ったものであると断じ、洪水規模を限定せず環境を考慮しできる対策を積み重ねることで安全度の向上を志向する「非定量治水」こそ、これからの社会に求められる治水理念だと土木工学の立場から指摘した。後者は、住民討論集会で余儀なくされた学習から独自のフィールド調査の蓄積を踏まえて、基本高水問題の本質とは数値そのものではなく、想定された

しての川が、ダムなどの近代的な河川改修によってその役割を阻害されていることをつまびらかにするとともに、川が本来持つ役割を尊重した河川改修を志向する流域住民の生活実感に基づき認識が、現実的で正当な見解であると示すことにもなった。

これらの実践は、国交省や首長らに提出する要望書や独自の検証パンフレットへと展開すると同時に、継続的な学習に裏打ちされた体系的な理論へと醸成されていく。その集大成が、2013年4月に開催された「脱「基本高水治水」研究会」であり、そこでの議論を基に編まれた本冊子『脱「基本高水治水」研究誌―自然の川を未来に手渡そう―』である。

② 2014年1月6日、手渡す会定例会でのインタビューでの証言による。

③ 筆者が知るだけでも、2005「検証・台風14号と川辺川ダム計画」、2006「検証・7月豪雨と川辺川ダム計画」、2008「検証・6月豪雨と川辺川ダム計画」がある。このうち、2005・2006の調査記録は、同資料集成第9巻に所収されている。

④ 「2005年度川辺川濁水調査報告」としてまとめられたものが、同資料集成第9巻250～257頁に所収されている。

⑤ 「台風16号(H16)・台風14号(H17)の水害被災者が臨治水対策―水害被災者の声―」としてまとめられた(未公開)。

一定量の洪水をダムと連続堤防の内側に閉じ込めることを是とする理念にあり、それが川と流域に何をもたらしているかを注視することが重要とする認識に至った経緯が、示されている。

続く第二章では、《「基本高水」問題の議論を深めるために》と題して、研究会での議論を踏まえ、治水のあり方を考えるためにはまず川と流域社会における自然史と人間の営みの歴史を踏まえる必要性があった上で、川と一体であった暮らしに既存のダムが何をもたらしたかを詳述することで、川辺川ダム建設に反対する流域住民の経験を普遍化することを試みている。ダムは連続堤防とセットで建設され、豊かな自然を育む清流・球磨川を、早瀬や淵を消し堆砂を促し急激な増水をもたらす生物多様性に乏しい水路へと、変化させてしまった。川と暮らしとを連続堤防で断絶させ洪水をダムと連続堤防に閉じ込めることを是とするものこそ、基本高水を前提とした治水理念、すなわち「基本高水治水」である。基本高水の数値に科学的根拠が乏しいことは住民討論集会での経緯を踏まれば明白であり、これを脱ダムの中心に据えるべきではない。むしろ、流域社会が独自の風土を踏まえどのような土地利用を行うことで減災しつつ川の恵みを享受してきたのか、川とどのような付き合い方を暮らしのなかで育んできたがゆ

えにヒトを含む豊かな生態系を育む清流を遺せたのかをこそ、脱ダムを含む川の問題を考える際に重視すべきである。こうしたことが、平易な言葉で論じられる。

第三章では《脱「基本高水治水」に期待すること》として、研究会参加者6名からの所感がそれぞれ見開き1ページで述べられている。

生活実感としてダムの弊害を理解していた人々は、住民討論集会で習慣となった学習を発展させていった。球磨川水系流域を踏査し、得られたデータの検証を積み重ねる中で、ダム建設の根拠となる基本高水そのものへの疑念を深めていく。

具体的には、数値を出すために採用する計算手法の妥当性、現実に則した科学的法則性について、一貫して説得力ある説明をできるものではなく、政治力学により数値が変動しかねないものであり、さらには生活実感にも見合わないものであることを、再発見していったのである。そして、川との距離が近い暮らしを代々重ねてきた流域住民が望む、自然の川を破壊せず固有の風土や現代の生活様式も踏まえた河川改修の理念および各地区における河川改修の具体案を、要望書などで提起した。

河川工学の碩学として知られる高橋裕氏はかつて「元来、

鋭敏な自然風を持つわが国土は、開発などによる人工を加えられるたびにそれにいち早く反応する。そして、豪雨のような試練の際に、そこに加えられた人工の適否が試されるとみてよい。水害の現われ方を、そのような観点から眺めれば、そこにそれ以後の開発のあり方への指針が必ず隠されているに違いない」と指摘した^⑥。本冊子は、川辺川ダム建設反対運動の中で流域住民が直面せざるを得なかった球磨川水系の「それ以後の開発のあり方への指針」をどう模索してきたのか、そして今なお模索しているのかを、はつきりと伝えてくれるものである。

※手渡す会のご厚意で、ご希望の方に本書を頒布できることになりました。郵送代のみご負担をお願いします。ご希望の方は、お名前・郵送先・ご連絡先（お電話/e-mail）をsmori@kochi-u.ac.jp（メール）か0888-8888-8043（FAX）までお知らせください。郵送代のご負担方法をご相談の上、発送します。

【もり・さやか／高知市】

⑥ 高橋裕 1971 『国土の変貌と水害』 岩波書店 66頁

お休みどころ通信 ⑪

中村哲さんの死を知る

精神科医 興野康也

子どもの精神科の学会が沖繩であるので、12月4日は夕方から飛行機に乗って沖繩にきていました。空港からタクシーに乗って宜野湾市のビジネスホテルに着き、ホッとしていたところに、友人の渡邊典子さんからメッセージがありました。「中村哲さんの死

ショックです。「えっ？」と思いましたが、インターネットで見るとどうやらほんとうでした。哲さんが亡くなられたのです。

哲さんはパキスタンやアフガニスタンで無償の医療活動をしていた医師です。僕は京都の論楽社に入りにいたところ、講演にみえた哲さんと何度か話をしたことがあります。哲さんは小柄で、特段「カリスマのオーラがある」といった感じではなく、どこにいても風景に溶け込む方でした。偉人といった風貌ではなく、口べた

だけど気さくなおっちゃんといった感じでした。それなのに哲さんの話される医療活動は壮大で壮絶で、そのギャップに驚かされるのでした。

そのころは僕も自分のやるべきことがわからず、いろんな人に疑問をぶつけていた時期でした。哲さんにも問いかけてみたのですが、あまり正面から答えられず、肩透かしを食った記憶があります。ですが「後ろ姿」で答えられるようなところがあり、結局は哲さんは僕の人生のモデルになりました。「狭い意味での医療の枠にとらわれず、地域の人たちのためになることを何でも探す」という姿勢は、哲さんから学んだものです。

以前1999年にパキスタンの辺境にあるペンシャワールに行ったことがあります。哲さんたち「ペンシャワール会」の皆さんの永年の念願であっ



た拠点病院がやっと完成したので。そのときのツアーに参加したのでした。ペシャワール会は哲さんを応援する日本の人たちの寄付をもとに、現地で働く日本人と、哲さんたちが養成した現地スタッフとで成り立っています。記念式典ではスタッフ全員の喜びを感じました。しかしその後2003年に病院はパキスタン政府に「持つていかれて」しまいます。そして人々の健康問題がより深刻なアフガニスタンに哲さんは活動の拠点を移していくのです。僕なら心が折れるところです。

アフガニスタンの辺境では温暖化による大規模な飢饉が起きます。泥水を飲んだりして子どもが感染症で亡くなっていくので、哲さんは井戸掘りの活動を始めます。さらに水不足で農地が砂漠化していくのを食い止

りまでをする」という答え以外には思い浮かばないのです。

哲さんは非常に残酷な殺され方をしました。自分の活動に殉じたとも言えます。命をかけて人々のために働く人を僕はほとんど見たことがありません。生きて哲さんとお会いできたことは僕の人生のなかでも幸運なことです。ありがとうございます。あとのことは哲さんの同志の皆さんが進めていかれるでしょう。そして哲さんが撒いた種はいずれ違った形で芽を出して、現地の人々の平和につながっていくのだと信じます。

【おきの・やすなり／人吉市】

めようと、水路を作ったり、河川の護岸工事も始めます。さらには乾燥に強い農作物を現地の人が育てていけるようにと農業試験場まで作られます。もはや医療ではなく政治に近い領域ですが、現地は政治が崩壊していて、哲さんたちがやらざるを得なかったのです。自分たちはあくまでも非常時に代理としてやっているのであり、本来やるべき機関がしっかりとってきたら、スムーズにそこに譲るというのが哲さんたちの姿勢でした。このようなわけで、現地の人たちの信頼も厚く、現地の人たちがペシャワール会スタッフを守ろうとしていました。だからこそ内戦状態でも活動できていたのです。ですが2008年にスタッフの伊藤和也さんがテロリストによつて殺されてしまいました。このあとはいままで以上に安全対策

に力を入れていました。まさか哲さん自身も殺されるとは思いませんでした。哲さんの活動範囲は年々大きくなり、当初は数百人〜数千程度の人々の支援から始まったのに、最後には数十万人の農耕生活を守るくらいにまで大きくなりました。それは問題があったときに、見過ごさずに立ち向かっていった結果です。ですが活動自体がどんどん危険になっていったのも確かです。井戸掘りや水路建設も大部分はできあがってきていたので、時期を見てアフガニスタンから撤退すべきだったのかもしれない。しかし哲さんの人柄からは帰るといふ選択は思い浮かびません。「やりだしたことは、形になるまでやりとげ、そして現地の人たちが維持管理していける体制作

くまがわ春秋歌壇

いもこ短歌会

ひたすらにアフガンの人救わんとかの地に生きし小さき巨人よ
水を引き蘇らせし緑の地その片隅に我を埋めよ

〈中村哲さん襲撃され死去12月4日〉

柳原 三男

山茶花の寒に耐えつつ満開に色褪せぬまま美しく散る
山里にたわわに実りし柿の実を挽る人なく花のごとくに

坂本 ケイ

車椅子の生活なれど日々楽し孫やひ孫に囲まれ生きて
ひい孫が成人式を迎う年吾は白寿なり生きておりたし

上田 廸子

美しき花を政治が汚しゆく桜はらはら涙を濺ぐ
嘘に嘘重ねてきたる政権のほころびあらわ終焉の見ゆ

上田 精一

熊本県近代文化功労者、渋谷敦のこと

— グローカル的・地域文化研究の実践者 —

八洲開発株式会社取締役 木崎康弘

一、出生

「あっちゃん」

熊本県近代文化功労者の一人高田素次は、渋谷敦をこう呼んで、可愛かった。

渋谷もまた、高田の調査研究を物心両面でサポートし、それに応えた。

それは高田が兄で、渋谷が弟だったからだ。何故か、

「姓」が違っていた。



渋谷敦
(1924～2011)

渋谷は、一九二四（大正十三）年四月六日、球磨郡一武村（現・錦町一武）の渋谷家に生まれた。父は、

球磨郡上村の人で、朝鮮総督府の技官の高田八郎。母は、母校の大江女学校に勤めていた澁谷幸。二人の新婚生活は日本統治時代の朝鮮、慶尚北道大邱府（現・大邱広域市）から始まり、幸は新しい生命を身籠った。しかしそんな生活は長く続くことはなく、八郎は間もなく結核に倒れ、幸は六か月の身重の身体で、八郎を伴い帰国。九大病院に入院させるも、不帰の客となった。斯くして、幸は澁谷家に復し、敦は生まれた。高田は、この八郎の長男。つまり、敦の異母兄だったのである。

こうした境遇の中にあつた二人。高田は、幸を「最後まで」「お母さんと呼んで、甘え、十三歳年下の弟を「あっちゃん」と呼んで、地域文化研究に誘っていったのである。

二、調査研究の開始

渋谷「地域文化研究」的スタンス―現場主義の貫徹―

渋谷敦は、一九四八年（昭和二十三年）四月に、一武中学校から新制の荒尾高校に国語教師として異動した。そして、球磨商業高校の教頭を最後に教師生活にピリオドを打った。その間の高校を順に挙げていけば、は人吉高校（一九五二年四月～一九六三年三月）、球磨工業高校（一九六三年四月～一九七二年三月）、球磨商業高校（一九七二年四月～一九八三年三月）。渋谷は、この間に熊本の地域文化研究に大きな地歩を築いていった。その学的スタイルは、現場主義。ジャンル毎に辿ってみよう。

①近世開削溝の調査実践―

球磨の地域文化研究は、母校人吉高校への転勤が契機となった。高校生を駆り出して行ったのが、近世に開削された二本の溝のトンネル調査。幸野溝は一九五六（昭和三十一年）で、木上溝は一九五七（昭和三十二年）年。それらの成果は、一九五八（昭和三十三年）年発行の『幸野溝』、一九六一（昭和三十六）年発行の『木上村史 木上村の民話と歴史』（高田素次編著）に収められている。特に、

幸野溝の調査では、三本のトンネルの全長が二三六二m だったこと、その長さは京都の蹴上インクラインが二八九〇（明治二十三年）年に完成するまでは日本一の長さだったことを突き止めた。

②民俗学研究

渋谷は、一九六一（昭和三十六）年八月十日、東京の成城の自宅に柳田国男を訪ねた。それに先立つ年に、民俗学のテーマに関係する論文を認めていたことは偶然ではないはずだ。そこで、その辺りを見てみよう。

三上秀吉の勧めで雑誌『新文明』に執筆したのが「樅樽考」（九一五、一九五九年）と「熊野ナギ」（九一十、一九五九年）。この中で「ナギ」は、熊野三山を巡拝した際に、那智宮で貰ったナギの苗木と、速玉宮や本宮で拾わせてもらったナギの種子を題材したもの。さらに探求は続き、「熊野と球磨のナギ（十一、一九六〇年）」を書いた。熊本県内や人吉盆地の神社とナギの事例を实地調査し、「いつか誰かが、はるばると紀州路に出かけて、熊野三山を巡拝し」、「熊野記念としてナギの苗木や種子を持ちかえった」と自らの姿を投射した。さらに、同じ年に書いた『因伯民俗』の「ナギ談義」（二六六）、『國學院雑誌』の「ナギ考―九

州における熊野信仰管見」(六十六―五、一九六五年)と考察は続いた。

三上の勧めは、人吉のきじ馬にも及び、『新文明』の「土地師ときじ馬」(十一―十二、一九六〇年)となった。きじ馬の三つの系統、清水観音系(福岡県山門郡瀬高町清水観音)と北山田系(大分県の日田地方)と人吉系との関連を、「江戸時代を通じて、人吉藩には、よく柳河藩の薬種商が入りし、年にきまつて回壇してくるのに、英彦山の山伏があった。とすれば、薬屋と山伏のふところに抱かれて往来したものに、柳河と日田のきじ馬がなかったらうか。往昔。人吉とこれらのきじ馬との交流は、充分考えられてよいこと」との結論。

柳田訪問が契機となって書かれたのが、『片目の魚』考(『えとのす』二、一九七五年)。その折、「球磨の片目の魚は、いまも住んでいるの」との「静かな口調」での問いかけに、うんともすんとも言えなかったことから、五木村の八坂神社の神池、祇園池の現地調査と聞き取り調査。

③郷土研究部を率いて

高校生たちを地域文化研究の世界に誘ったことも大きな足跡だ。

三、渋谷「地域文化研究」の確立―

ローカルからグローバルへ―

一九六三(昭和三十八)年の日教組ヨーロッパ教育視察への参加は、渋谷の視野をローカルからグローバルへと広げさせる切っ掛けとなった。この旅の中で、佐世保市の美術教師、村上新一郎と意気投合。その後、家族ぐるみの交流へと発展。村上の長男、龍之助は、後に芥川賞作家の村上龍だが、渋谷の長女、あい子のことを「あいちゃん」と呼んで可愛がった。その紀行本が『私のヨーロッパ紀行』(私家版、一九六六年)で、挿絵や表紙を村上新一郎が描いた。

渋谷の真骨頂・日野熊蔵への探求が始まったのは、この頃から。グローバル的視野の発露だ。一九六〇(昭和三十一年)年は、「航空五〇年」を記念した祝賀イベントが日本各地で開催された。しかし、ある疑問が。

「初飛行五〇周年の、これらもろもろの祝賀行事の席上、日野氏の名はなぜ出なかったのか。徳川(好敏―筆者補筆)氏はなぜ日野氏のことに触れたがらなかったのか。」

そこで『人吉文化』に「日野熊蔵氏略年譜」(五十二、一九六六年)、『日野熊蔵伝―日本航空初期の真相』(青潮社 一九七七(昭和五十二))を上梓。その探

球磨工業高校では、郷土研究部を作って、人吉市の城本焼窯跡や湯前町の田上焼窯跡の近世の古窯跡などを発掘。調査報告書も発行させた。特に、強烈だったのは、錦町下り山須恵窯跡群の発掘と発掘調査報告書の作成。これに、肥後考古学会の関係者から『正式の報告書が出る前に、一高校だけで報告書をだすとは何事か』とひどいお叱りをうけた」とのクレーム。「どういふことか正式の報告書はついに出来なかった、今ではこの叱られたわれわれの報告書だけが唯一の貴重な資料となった」とは、なかなかの切り返しだった。

球磨商業高校では、さらに調査が活発化。挙げてみよう。球磨村の高沢焼窯跡、錦町の尼が土手、相良村の三石・小原横穴群、あさぎり町の勝福寺跡、上村焼古窯跡など。この中で、小原横穴群では、装飾文様の発見という快挙を記録した。調査報告書もしっかりと発行。

高校の考古学部ではなかなか出にくかった調査報告書を作成したことは、現場主義の貫徹がなせる業だった。

求の過程で知り得た関連情報を整理した『飛行機60年―日本の空の開拓者たち』(図書出版社、一九七二年)も出した。それらの著作の中にあつたものは、日野も顕彰すべきだとの確固たる信念。否、「二宮忠八、八頭良一、丸岡桂など」の「日本航空界の先駆者たち」もまた等しく顕彰しようとしたのだ。さらに、「電子頭脳による無人機が思いのまま飛び」は、グローバル的視野なくしては湧き出ない文章表現。「日本の航空六十年史をふりかえるうえで、この点だけはしっかりとわきまえておかない限り、ふたたび日本は将来アジアにおける軍事的にも経済的にも脅威国としての方向を進まないとも限らない」とも書いた。それは今日的課題である。

渋谷によれば、『空のモッコス―徳永熊雄伝』(創林社、一九八二年)と『日野熊蔵伝』とは、「いわば姉妹編ともいふべきもの」。初飛行を「成功に導いた功労者の一人に、当時陸軍の気球隊長だった徳永熊雄少佐(後に大佐)」がいたからだ。日野を追う中で、徳永の功績を記録に留めたいと、一九七八(昭和五十三)年七月号から一九七九(昭和五十四)十一月号まで、高田素次の世話で、後藤是山主宰の俳誌『東火』に連載。後に単行本化されたのが、『空

のモツコス―徳永熊雄伝』だった。

この外、「吉岡文六小伝―東条首相を赫怒させた男―」（『人吉文化』四十、一九六四年）もあり、五年後に、『無冠の帝王―ある新聞人の生涯―』（清風書房、一九六八年）を出した。「勝利か滅亡か戦局はこまで来た」「竹槍では間に合わぬ飛行機だ、海洋航空機だ」の見出しで一九四四（昭和十九）年二月二十三日付け『毎日新聞』第一面の戦局解説記事に、東條英機が激怒して起きた言論弾圧事件（竹槍事件）に斬然として立ち向かった人吉出身の吉岡文六がテーマ。そして、事件前の一九四三（昭和十八）年の十一月に吉岡に会ったのが、人吉出身の高木惣吉。後に『積乱雲―海軍少将高木惣吉―』（熊本日日新聞社、二〇〇〇年）の主人公だ。

四、渋谷「地域文化研究」の成熟

あるとき渋谷はこういった。

「この中では、肩書を『作家』にしてもらた。」

『歴史と旅』の関係個所に目を細めた渋谷をみると、どうも、「郷土史家」に違和感があったのだろう。著作中に、歴史小説が三冊ほどある。『剣豪丸目藏人佐』（私家版

の中で完結させるのではなく、幕末の時代的動態の中に位置付けようとしている。グローバル的視野の発露がそこにはある。

渋谷の詩いた種

『青雲遙かなり―歯科医ジユウグリット先生二井正典伝―』（熊本日日新聞情報文化センター、一九九六年）は、球磨出身の二井が、農業の労働者として渡米して、歯科医となつて帰国し、宮内省侍医寮御用掛になる。以後、明治大正、昭和三代の天皇の歯科侍医として勤務した、その二生を描いたもの。熊日出版文化賞に輝いた作品で、そこに記載されたものは、歴史資料の集積と分析、そしてメッセージだった。特に、米国で行った詳細綿密な調査は、「現場主義の貫徹」の「渋谷」学のスタンスが終生変わっていないかったことの表れ。このメッセージは、「次世代を担う青少年に夢と希望を抱かせ、第二、第三の二井氏を目指す若者に、世界の最先端の地を経験させる機会を創出する」ために人吉市が進めている高校生派遣事業の『二井正典「青雲の志」育成事業』に繋がった。

『積乱雲―海軍少将高木惣吉―』（熊本日日新聞社、

一九九一年）と『新説剣豪丸目藏人佐』（熊本日日新聞社、二〇〇七年）、そして『なば山騒動異聞』（人吉中央出版社、二〇一二年）だ。

『剣豪丸目藏人佐』と『新説剣豪丸目藏人佐』は、言うまでもなく、小説家・小山勝清が『それからの武蔵』で宮本武蔵と対戦させた剣豪の丸目藏人佐が題材。一方、『なば山騒動異聞』は、相良氏の家老、田代善右衛門の嫡男、政績が主人公。江戸幕府が渡辺華山、高野長英らを言論弾圧した「蛮社の獄（一八三九年）」に伴い自刃した若者だ。

人吉藩で、一八四二（天保十二）年に起こった百姓二揆なば山騒動と直接関係しない政績ではあるが、一九七五（昭和五十）年秋、渋谷は彼が果てた愛知県岡崎市を歩き、曹洞宗極楽寺に政績の墓があり、今でも供養が続けられている事実を知った。「幕末の政争にまみれ巻き込まれて」名を残す人々がいる一方で、「九州の片田舎、人吉藩土として、同じ時代に精一杯生きながら、そして心ならずも切腹自害して果てた、田代善右衛門、井口藤次左衛門、田代政績、それに相良佐仲の名は今も故郷の人々さえ誰も知らない」とは物哀しいが、ひとり人吉藩の事件を人吉藩

二〇〇〇年）にも渋谷の意思は貫かれている。立場が決定的に違う吉岡文六と高木惣吉が「竹槍事件」の前に会い、「何かを語った」事実が、今の日本社会、否、国際社会だからこそ共有されてよい。

日野熊蔵は、二〇〇六（平成十八）年度の熊本県近代文化功労者の顕彰者。その年の同じ月に、渋谷は『日野熊蔵伝―日本初のパイロット改訂版』（たまきな出版社）を上梓。日野という、闇に葬られてしまっそうになった一人の人物を、多くの関係者に会い、時に徳川好敏に向き合うなどして浮かび上げらせ航空史に位置付けた。公平公正を旨とした渋谷であつたればこそできた、渋谷の細やかなメッセージは、未だ輝き続け、多くの共感を得るに違いない。

考古学者・森本六爾の「一粒の粉、もし地にこぼれおちたらば、遂にただ一粒の粉に終わらないであろう。」ではないが、多くの若者たちに、「大志を抱き、広く世界の中に羽ばたけ」との思いを込めたメッセージは伝えられているのである。二十九歳で不慮の事故で早逝した長男浩一を、高校二年生で一年間のアメリカ留学に向かわせたのも同じ理由によるだろう。

五、むすびに代えて「地域文化研究への眼差し」
 球磨に生まれ、球磨に住み、球磨で逝った渋谷は、郷土球磨を愛した人だった。

そんな球磨のことをインバウンドの世界の中で活かしたい、そんな思いがほとぼしっていたのだろうが、実は、それが高木信之の翻訳になる、『人吉球磨英文ガイドブック (A Comprehensive Guide)』(私家版、一九八六)だった。また、河童を探しに来たドイツ人留学生モーア・ペチーナを、「ウジャウジャ」いる球磨の河童所縁のものに引き合わせたり、河童の故郷、遙か遠くタクマカン砂漠を旅して、地元民からヒョウタンや地胡瓜を「カップ」と呼ぶことを聞き出したり、と話題も事欠かない。

「松田町長に錦町史第三巻バ、頼まれたバイ。素次兄が書いた一巻、二巻も良かけど、チョッと違う視点も入れてミッデ。」

第一巻、第二巻は高田素次の編著作。つまり、兄の死後を受けての、弟へのバトンタッチだ。こうして執筆されたのが、『錦町史』第三巻(錦町教育委員会、一九九二年)の「消えた集落—大平山の場合—」。大野晋が「限界集落」

を提唱し過疎化が社会問題化する以前のこと。明治期に森林資源が着目された大平山の中にあつた、林業や製炭を生業とする集落がテーマで、一八六九(明治二)年に二戸一人の入植後、次第に人口が増加し、四十五戸、百七十一人をピークに。すると、一転、離村が進んだ。こうして、一九七五(昭和五十)年の前後にはムラが消えた。渋谷「地域文化研究」は、そんな社会情勢の変化に常に敏感で、現代社会が直面しているさまざまな問題に正面から向き合おうとしている、そんなところが、また魅力だ。

二〇二二(平成二十三)年十月七日卒。満八十七歳。
 渋谷家墓所に納骨。
 青雲院英賢文雄居士

(文中敬称略)

うんざり...

げっかん・ぎびょう



— アフガンに命の水を! —

アフガン支援に人生を捧げた中村哲医師に心から哀悼の意を表します。命を奪うテロ行為は絶対に許せません。永久支援の志を新年に受け継ぐベシャワールの会に期待。

外来語から学ぶ英単語 (46) …… 藤原 宏

スーツとスイート suit suite

この2語は同根で二重語となっています。語源はラテン語の「**squi** (セクイ)、従う・あとについて行く」です。

suit (スーツ) は「従う・あとについて行く」の原義から「ひと続き・ひとそろい・(トランプの13枚の同種札などの) 一組」や、「追い求める」意から「懇願・請願・訴訟・求婚」などの意も生まれました。

洋服の **suit** (スーツ) は上下の一揃いのことで、二つ揃いを「**two — piece** (ピース) **suit**」、三つ揃いを「**three — piece suit**」といいます。特に男子服では共布の背広・チョッキ・ズボンの三揃いを指します。因みに、背広は「**civil clothes** (シビルクローズ)、市民服」、チョッキはポルトガル語「**jaque** (ジャック)、上着の下に着るそでなしの胴着」、ズボンはフランス語「**jupon** (ジュボン)、スカート型の婦人用下着」からの借用と考えられています。

suite (スイート) は「従う・あとについて行く」の原義から「随員の一行・一そろいの家具・音楽の組曲・ホテルの高級な一続きの部屋」などの意で使われます。日本で言うスイートルームは和製英語です。

(413)

砂時計

—思い出るまぎに⑭

小野武巳

〔Ⅱ〕 母の部屋

⑩ 手紙―伯父へ⑩

父は一級建築士であった。上海に渡り、そこで財を成した。そして、僕が生まれた。太平洋戦争の敗戦により、すべてを打ち捨てて引き揚げて来てから我が家の窮乏生活が始まった。

各地を転々として最終的には佐世保市の早岐という町に落ち着いたのが昭和25年であり、朝鮮戦争の特需景気が始まったとはいえ、我が家の生活は苦しかった。

東大を出た伯父は、昭和26年に初代の九州電力社長になった。我が家の窮乏生活を見兼ね、父の就職を世話したのだが、一族郎党こそって九電に入った中で、父だけは女房の兄さんの世話になるわけにはいかぬ、と伯父の申し出

だけである。都会の喧騒にドギマギしながらも、母が書いてくれたメモを頼りに、尋ね尋ねて電車に乗り目的地に辿り着いた。

九電ビルは子供の二人にはとてつもなく「でっけえー」建物であった。田舎者の二人には山ほどにも見えたのであった。妹の手を握っている僕の手の平には汗がじっとりで、そしてビルの中に入った二人の頬に暑気はヒンヤリとして心地良かった。

受付の綺麗なお姉さんはボックスから出て来てニコニコ笑顔で教えてくれ、エレベーターの入口まで連れてってくれた。エレベーターに乗り込んだが、小さな二人は大勢の人に押されて隅っこでさらに小さくなる。

「うわあ、動いたあ、なんか、頭のクラッとするばい」
妹は遠慮なしだ。やがて社長室のある最上階に着いた。

皆は途中で降りてしまつて乗っていたのは二人だけになっていた。僕は、見栄はる君だった。さも判つた風にフカフカのジウタンを踏みしめ、妹の手をグイッと引つ張つて歩く。妹は無遠慮に辺りをキョロキョロと見廻している。

「あつ、ターちゃん、あそこに伯父さんの居らすよ」

妹が大発見をしたかのように声を上げて、駆け出して行

を断つたということであった。そうした貧しさのなか九電社長の伯父の存在は絶大だし、福の神だったし切り札であったようだ。なにかにつけてギリギリになると母は伯父の援助に頼っていた事実は否めなかった。

「ターちゃん、ちよつと遠いけど博多の伯父さんの処に行つて頂戴」

夏休みのある朝早く、母に言い付かった僕は妹と連れ立って家を後にした。前の晩にでも認めていたのだろう、「伯父さんに渡してね」と、封筒に入れた手紙を僕の胸のポケットにしつかと押し込んだのだつた。

早岐駅で鈍行列車に乗り込む。列車は重々しく車輪を軋ませながらホームを離れる。出発だ。初めての長旅、心の準備は整っていたはずだが不透明な不安が胸を過つていく。妹の手前弱気は見せられない。妹を窓際に座らせ、しっかりと手を握つてやる。妹は僕の気持ちはいざ知らず、過ぎゆく車窓に目を走らせ、いつになく饒舌になり、あれやこれやと語りかけてきては有頂天の様子であった。

よつやつと列車は博多駅に着いた。

僕と妹は大きく背伸びしながら改札を出る。子供二人

く。

「えつ、なんだ、バカ、そいは伯父さんの銅像じゃがね」
声をひそめて妹をたしなめる。伯父さんの銅像は突き当たり際の壁際に鎮座ましました。

と、その時、その手前の重厚な扉が開いて、ポマードをテカテカポンプンさせ、背広をパリツと着こなした若い男の人が出て来た。そして、僕と妹を『何んだ、この胡散臭い子供たちは』とばかりにジロリツと見下げたのであった。

「何か、用かね。僕たち」

「はい、篤二郎伯父さんに逢いに来たとです」

僕は緊張して、気を付けて答えた。

「とくじろつオジさんっ」

ポマードテカテカさんはピンとこないふつに首を傾げた。

「そがんです。母のお兄さんです。九電の社長です」

「えつ、社長？」

今度は社長と聞いて、男の人が直立した。

僕は胸ポケットの手紙をしつかりと押さえ、オジさんに逢いたい旨を伝える。

「わかった。そこで待つときなさい。君の名前は？」

扉を開けそそくさと戻つていったポマードテカテカさん

が再度出て来て、扉をグイッと引き開けると、僕たち入りなさい、と言った。

「すげえ部屋たいね、こいが社長室つてな。俺いの家全部の部屋くらい広かばい」

僕はキョロキョロと眺めまわしたが、妹は雰囲気に気圧されたかのように僕の後ろに隠れておどおどしている。

正面のどかい机にちよこんと座っているのが伯父さんだ。でつぷりと太っていて小柄だったので、机が余りにも大きく見たのかも知れない。何やら書類にドカンドカンとハンコを押している。

ポマードテカテカさんに促されて二人は革製のソファに座ったが、ブヨヨンと埋もれてしまい、座り心地は良いけどお尻がなんとなく落ち着かない。大きな窓から差し込む明るい日差しの下、母と同じく真ん丸の顔、目も耳も口元の形もそっくりの伯父を正面に認めて、やつとりラックスして来たのであった。

「おーお、よう来たな。ところで、マシちゃんは元気かの？」
ひとしきり仕事を終え、二人の前のソファにどつかと座り、葉巻に火を点けながら、伯父さんは言った。

「マシちゃん？」 キョトンとする僕。

「渡辺、ビルの地下で、何か美味しいものでも食べさせて、それから帰りの汽車に乗せなさい」

伯父さんはポマードテカテカさんに命令した。

「ハイ、かしこまりました」

「では、篤二郎伯父さん、母のことよろしくお願ひします。有難うございました」

僕は大役を果たした安堵感でホッとしながらも、いつちよ前に挨拶したのだった。

「よし、よし。気を付けて帰んなさい。うむ。渡辺、いかな、チャンとしてあげなさい」

歩み寄った伯父さんは僕と妹の頭を撫でくれた。社長室の扉をぐぐぐいっとポマードテカテカさんが開けてくれた。部屋を出る時、背中一杯に伯父さんの温かな視線を感じ思わず振り向くと、優しく頷いてくれたのだった。それはとても優しい眼差しであった。僕もしつかりと頭を下げて、なんとなく後ろ髪を引かれる思いのまま退出したのだった。

【おの・たけみ／小児科医院院長、宮崎市大塚町】

「お前の、お母さんたい。元気にしとるかの」
そう言えば母の里は東北の飯坂町だったつけ。今だ、時としてズズウ弁が出る。だから伯父さんもズズウ弁なのだった。母の名は「ます子」である。

ズズウ弁では「ます子」が「まし子」になるのだった。
「ハイ、元気です。ばつてん、仕立物ばつかし、しよらすとです。忙しかけんが、今日は母の用事で来たとです」
そこで僕は胸のポケットから取り出した手紙をうやうやしく伯父さんに手渡したのであった。

伯父さんは手紙に目を走らせていたが、読み終わると綺麗にたたんでワイシャツの胸ポケットに仕舞うと、再び優しい目を向けて言った。

「よう判ったよ、伯父さんがちゃんとしとくからと、お母さんに伝えなさい」

「勉強は何が好きかな」

「はい、算数と国語が好きです。社会が苦手…」

「大学は、東大に行きたかです」

「ウワツハツハツハツ、そうか、伯父さんの後輩になるか。それじゃ、しつかり勉強しなさい」

「そうだな、折角だから、何か食べて帰るかな」

すべての人を自分の親だと思って…



- 一般介護施設
- 生活介護
- 老人福祉施設
- 特別養老院
- 短期入所
- 通所介護
- 居宅介護
- 介護事業
- 介護支援事業

社会福祉法人 天雲会

龍生園

〒868-0086 人吉市下原田町瓜生田1057-9
施設部門 ☎0966-22-6621 FAX 0966-22-6622
在宅部門 ☎0966-22-2141 FAX 0966-22-2183
URL : www.ryuseien.jp
E-mail : tenukai-daihyou@ryuseien.jp

編集後記

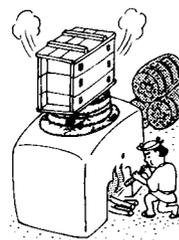
年末に悲しいニュースが飛び込んだ。『ペシャワール会』の中村哲医師が銃弾に倒れたという。本誌の今号でも中村医師のことは散見される。人柄などについては、興野康也さんの「お休みどころ通信⑩ 中村哲さんの死を知る」(65頁)に詳しい。★坂本町で昨年話題になった二つ、「昨年」の坂本町で発見された恐竜化石(4頁)、「やっちろドラゴントレイルラン」(20頁)は今後の展開が楽しみな出来事。人吉市の「野球の聖地化プロジェクト」(3頁)と共に注目したい動きである。★人吉球磨では茅葺屋根を見ることはそれほど珍しいことではないが、上村和代さんのルポ「人吉球磨の茅葺屋根」(10頁)を読むと、これらの伝統を受け継いでいくには課題も多いようだ。★平和の祭典が開かれる今年、年明けからイランとアメリカの衝撃的なニュースが流れた。なんとも皮肉な幕開けだが、各国はこの事態にどのように関わっていくのだろうか。(ま)

〒868-0015
熊本市下城本町1436-4の3号
人吉中央出版社「くまがわ春秋」編集部
info@hiyoshi.co.jp
電話・ファックス 0966-23-3759

インフォメーション

- 1月12日(日)
▽消防出初め式(人吉市・相良村)
▽「上相良氏の城下町を歩く」(多良木町内)
▽第37回五木村新春駅伝大会
1月18日(土)
▽人吉市図書館「図書館まつり」(人吉市カルチャーパレス)
▽くまもと散歩「山江村万江清流コース」
1月19日(日)
▽第8回公認奥球磨ロードレース大会(水上中学校校スタート・水上村役場前ゴール)
▽必勝!合格祈願ノ旅「合格勝ち取りツアー」(球磨村一勝地)
▽山江村新春駅伝大会
▽相良村民駅伝大会
▽八代市「野鳥観察会」(鼠蔵町研修所集合)
1月26日(日)
▽水上村「第56回桜の里一周駅伝大会」

匠の技



◆納豆みそ(お徳用) 300円(税抜)

◆納豆みそ(税抜) 477円

御膳醤油
(だし入り万能しょうゆ)



◆玉子かけご飯
◆豆腐
◆お刺身に
300ml 650円(税抜)



◆みそ煎餅 477円(税抜)

人吉散策コース 九州特産 蔵めぐり

みそ・しょうゆ蔵

資材
会社
マルカマ

釜田醸造所

会長 釜田元嘉頭
社長 釜田元嘉頭

〒868-0001 熊本市人吉市鍛冶屋町16
電話 (0966) 22-3164
FAX (0966) 22-3165
メール info@marukama.co.jp



TAKEDA Eye Clinic

たけだ眼科クリニック

院長 竹田 憲司

人吉市南泉田町39 ☎23-3096

めがね・コンタクトレンズの

アイウェア 榎

(たけだ眼科ビル内) ☎0966-23-3097

デイサービスセンター

ケアプラン作成所いずみ
(居宅介護支援事業所)

いずみ

協力医療機関 たけだ眼科クリニック
人吉市南泉田町70番地の3 ☎0966-28-3307